

出 島 山 下 貝 塚

—宮城県牡鹿郡女川町—

第一次調査概況報告書

1 9 7 0

宮城県小牛田農林高等学校
郷土研究班

出島山下貝塚調査概報

目 次

I	出島の現況と遺跡の位置	34
II	本貝塚発見の動機	35
III	調査の経過	36
IV	出土品	40
1.	自然遺物	//
①	貝 殻	//
②	魚 骨	//
③	獣 骨	//
④	鳥 骨	//
⑤	そ の 他	//
2.	土 器	//
3.	石 器	41
①	石 鏃	//
②	石 鏃	//
③	磨製石斧頭部	//
④	磨製石斧頭部	//
⑤	打製石斧頭部	//
⑥~⑩	方孔石	42
⑪~⑬	凹 石	//
⑭	有孔円形石盤破片	//
4.	骨 角 器	//
①	釣 針	//
②	釣 針	//
③	釣 針	//
④	組合せ式釣針	42
⑤	組合せ式釣針	43
⑥	組合せ式釣針	//
⑦	銚	//
⑧	銚 頭	//
⑨	骨 匙	//
⑩	牙 鏃	//
⑪	鹿角製品破片	//
5.	その他の出土品	//
①~⑨	土 錘	//
⑩~⑫	垂 飾 具	44
⑬	貝 斧	//
⑭	貝 鋸	//
V	考 察	//

写真・図版目録

- 第1図 出島港全景
第2図 寺間港全景
第3図 出島山下貝塚測量図
第4図 第Ⅲトレンチより北西方海上を望む
第5図 出島山下貝塚第Ⅲトレンチ実測図
第6図 遺跡付近に展開するリアス式海岸の風景
第7図 出島全図
第8図 遺跡遠望
第9図 遺跡全景
第10図 I'トレンチ貝層の一部
第11図 釣針出土状況
第12図 土器出土状況
第13図 Ⅲトレンチウニ・シウリ層断面
第14図 Ⅲトレンチ貝層の一部
第15図 出土貝類サンプル
第16図 検出されたウニの棘皮・骨板その他
第17図 魚、獣、鳥骨類その他
第18図 土 器
第19図 "
第20図 "
第21図 "
第22図 "
第23図 " (片口土器)
第24図 "
第25図 "
第26図 "
第27図 石 鏃
第28図 打製・磨製石斧頭部
第29図 凹石の一部
第30図 方孔石の一部
第31図 骨角器類の一部
第32図 釣針拡大写真
第33図 鋸
第34図 現在使用されている釣針との比較(マグロ用)
第35図 垂 飾 具? (ユキノカサ)
第36図 土 錘?
第37図 貝斧? 貝鋸?

出島山下貝塚調査概報

(宮城県牡鹿郡女川町出島山下所在)

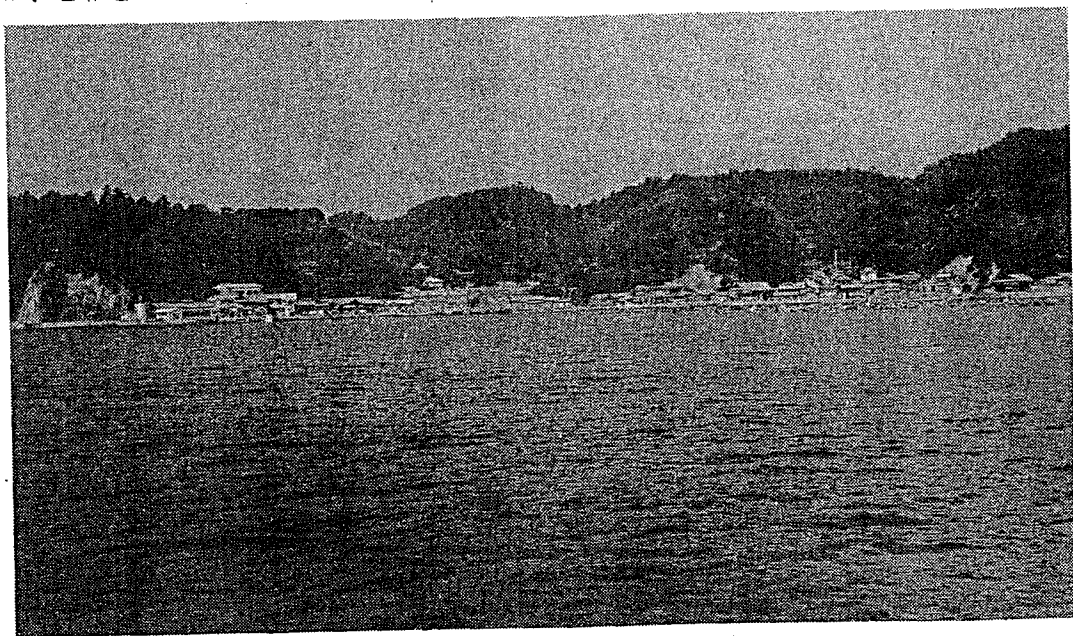
宮城県小牛田農林高等学校

教諭 辺見 鞆 高

I 出島の現況と遺跡の位置

出島は、宮城県牡鹿郡女川町の一部に属し、女川港の北東方9.1キロの海上に浮ぶ離島である(北緯38度27分15秒、東経141度31分3秒)。本島の東側は直接太平洋に面し、そのため波浪によって浸蝕された複雑な岩石海岸となり、いわゆるリアス式海岸の様相を呈している。しかし、島の西岸は女川湾と雄勝湾によって抱擁され、常に波静かで、恵まれた地形と相俟って出島、寺間等の天然の良港をつくっている。島の遙か南方には金華山の霊峰が聳え、又東南方の海上には江の島、笠貝島、平島、二股島等の小島が望まれる。こうして付近一帯に展開するリアス式海岸と共に誠に明美な風景を現出している。

本島は南北3.75キロ、東西1.5キロ、面積2.07平方キロで南北に長い小島である。島内には河川はなく、又高峻な山もない。島全体が山地地形をなしているが、そのうちでも南部は僅かに高く87.8メートルの標高を示している。本島は、概ね古生紀層であり、地質は褐色粘土質土壌で、腐蝕土は少く、生産性は一般に乏しい。農耕は僅かな平坦面や傾斜面を利用して行なわれているが、自給を目標に小規模に営まれているに過ぎない。

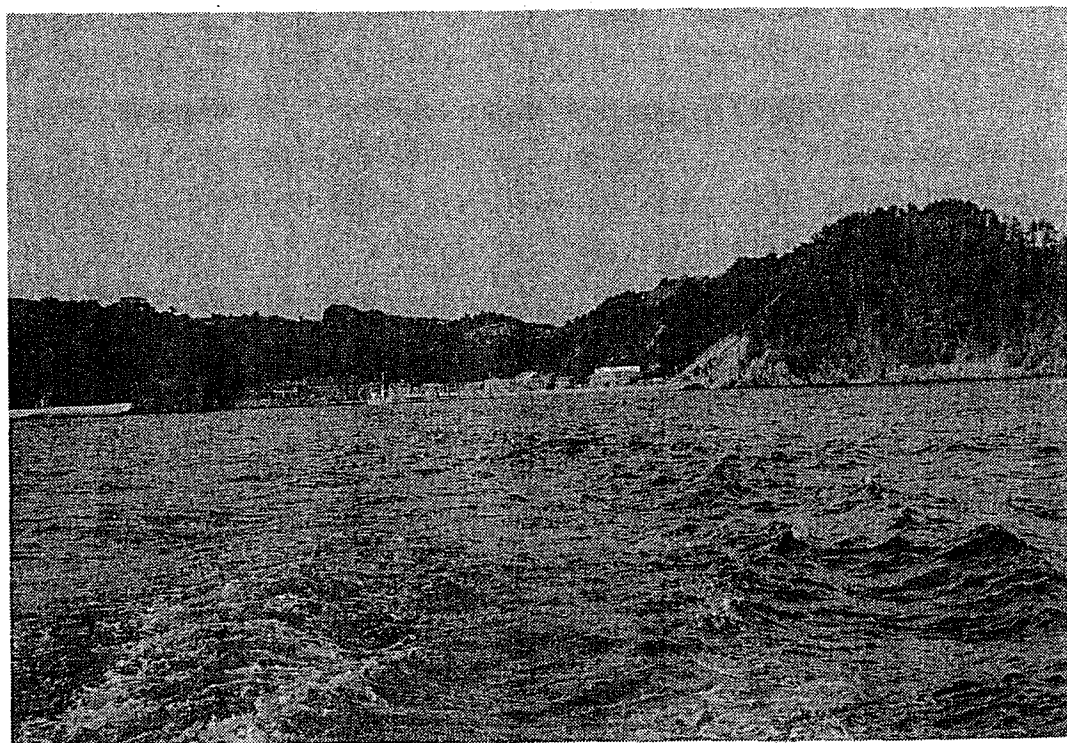


第1図 出島港全景

本島には出島・寺間の両部落を併せ約1,700名のぼる島民が居住しているが、そのほとんどが漁業に従事しており典型的な漁業集落を形成している。

本島は、三陸の漁場に近い位置を占めている。従って、先史時代においては一層魚族が豊かであったろうし、又背後の山地からは獸類が豊富に得られたに相違ない。従って先史時代においては本島は海の幸、山の幸に恵まれた生活の理想郷であったと思われる。

本島には、島を南北に通る尾根があるが、その上を出島・寺間両部落を結ぶ県道が走っている。そのほぼ中間には女川第四小学校、同第二中学校があるが、それよりやや南寄りの地点より勾配の急な西側の斜面に沿って小径が延びている。それを辿って斜面をおりると、やがて小湾に突き当たる。この付近は山下と呼ばれる小区域であるが、急崖が直ちに海に迫っているため平坦面はなく、従って島民からは見捨てられていた地域である。貝塚はこの小湾に向って迫っている北向き



第2図 寺間港全景

の急傾斜面の比較的下方に位置している。これまでに調査を行なった本島内における各遺跡との関係位置を見るならば、配石遺構群は本貝塚の、ほぼ頭上にあるといってよく、又縄文前・中期の遺物を出す米子立貝塚は本貝塚の反対斜面、すなわち南側にあることになり、この地域が今のところ本島内における遺跡の集合地点といってよい。

II 本貝塚発見の動機

寺間において水産加工業を営む阿部八治郎氏は、この地に水産加工所を設立するため、昭和44年、海岸の一部を掘り崩して地ならしを行ない敷地の造成を行なった。その後、青色トタン張りの

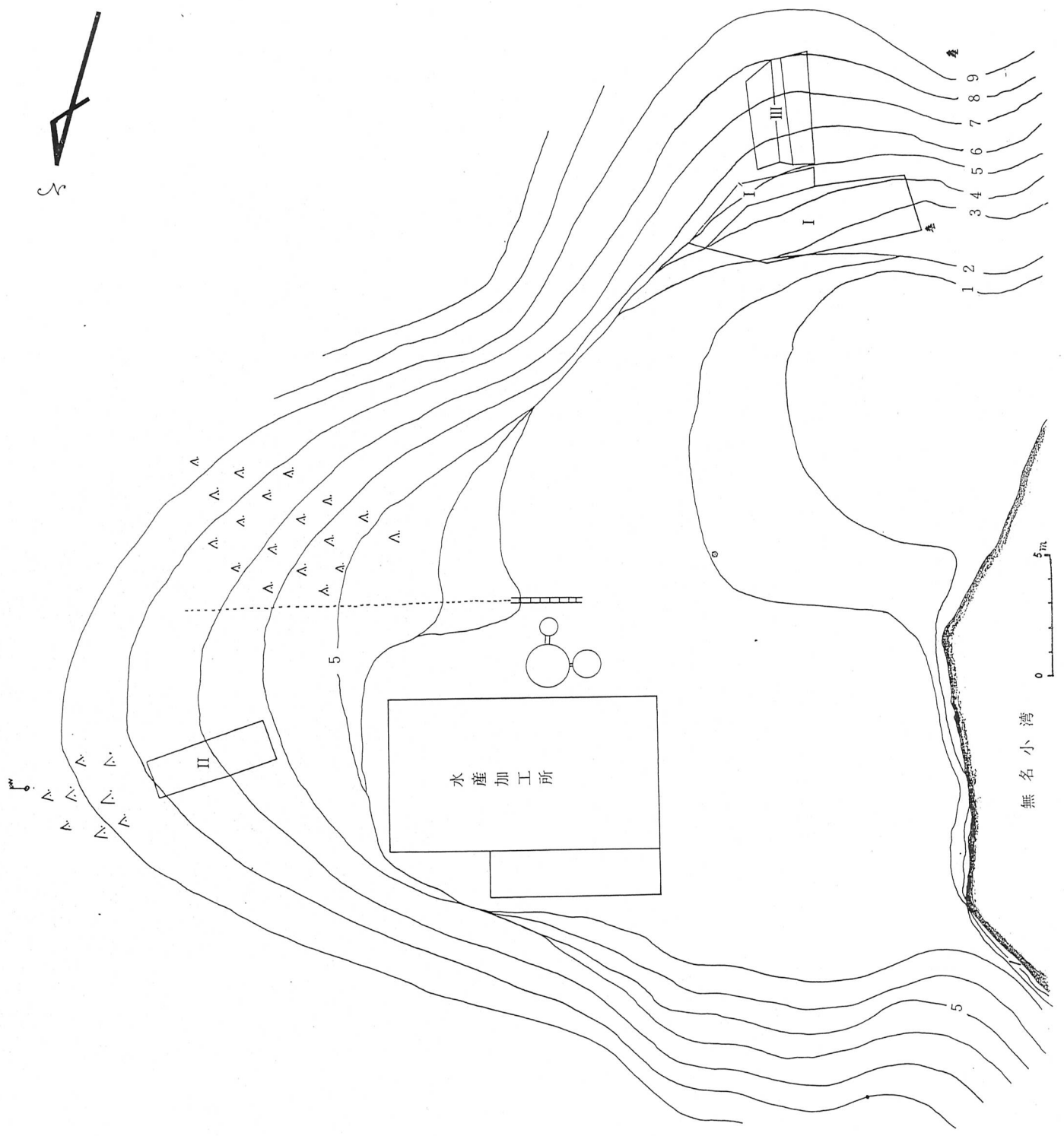
環境とは不似合いな小加工所が設立されたが、昨夏、筆者は、この地に突然建築物がつくられたことに奇異の感を抱き、この地を訪れた。その際、海岸付近の随所から縄文土器片が発見され、この加工所付近に遺物包含層のあることが推定された。その後、数度にわたる踏査により包含層の所在も、いよいよ明らかになって来たので昭和45年度の夏季休業を期し発掘調査に踏み切ることとなった。

Ⅲ 調査の経過

小牛田農林高校生をもって編成された30名の調査班は、昭和45年7月24日、同島に渡った。先ず現地の写真撮影、測量等に着手することとなったが、この時点で意外な事実を発見した。すなわち加工所の南方約20メートルの地点には漁業用に使用する竹材の集積所があるが、その付近の傾斜面を切り崩した断面には可成り多くの土器片が露出しており、むしろ、この層こそ主要包含層であることが確認された。これまでの計画に修正を加え、この地点に7m×2.5mのIトレンチを設定することとした。先ず表土の除去に着手したが表土には堀の内式、大木10式に併行する縄文式土器片及び凹石、穿孔を有する径4センチ位の小石、魚骨、獣骨片等が含まれ約5センチの厚さを示していた。又これらに混って貝殻破片も見られたが問題にすべき量ではなかった。包含層には大小の不整形の自然石が随所に含まれ、この部分が嘗て上方の傾斜面から落下したものであることを物語っていた。この層を更に掘り進み表土下約10センチに達すると堀の内式に併行する土器片がまばらに分布し、その間にカキ、アワビ等の貝殻片が散見された。更にマグロ、カツオ等の魚骨片やイノシシ、シカ等の獣骨片、鹿角片が混入していたが、それらに混って魚錘、骨角器、牙器等が発見されたのは貴重であった。又凹石が意外に多く混入していた。約20センチ掘り下げて第2日目を迎えたが依然として同様の状態を続け、特に変化は見られなかった。土器はいずれも破片であり、又一括遺物の状態で発見されたものも全くなかった。このトレンチは約40度の急傾斜面の末端部であり、従って上方にあった包含層の一部が過去において崩落し、堆積したものであると思われる。

第7日目に至り、ようやく地山に達したが、その間ほとんど同様の状態を繰り返し、層位の区分は認められなかった。すでに地表面下約60センチに達していた。なおこの長方形トレンチの両端は全く遺物を欠いていた。

第1トレンチの南側に隣接する小区域には可成り密な貝層が見られ、発掘者の注目を集めていた。第1トレンチの南側断面を観察すると、この貝層の厚さは約50センチに過ぎないが決して無視すべき存在ではなかった。この区域には長さ3メートル、巾1メートルのトレンチを設定しIトレンチと命名して、すでに第2日目より3名の人員を配置して追究に当らせていた。主要貝類はカキ、アワビ、シウリ、オオヘビガイ等でハマグリは僅かに二、三を数えるに過ぎなかった。貝層が薄いことは貝類の成育に適する砂浜の少いことを意味するものであって、リアス式海岸を以て特徴とする三陸沿岸における貝塚の共通的性格であろう。土器類は大木10式、加曾利B式等に併行する縄文式土器で、いずれも破片であり、又一括遺物の状態で発見されたものもなかった。



この貝層からも凹石や魚骨、獣骨片、イノシシの歯牙等が発見されたが、それらに混って石鏃、魚錘、鹿角製銚、鹿角製釣針等が発見され発掘者の注目を集めた。

I'トレンチは前述のように長さ3メートル、巾1メートルの小面積に過ぎないが勿論これに止まるものではなく当然前述のIトレンチ上にも堆積があったと思われる。しかし、それらは竹材置場の敷地造成の際、削り取られ、消失してしまったのであろう。現在、汀線付近に漂っている表面が著しく磨耗している土器小片は、おそらくその事実を物語っているであろう。

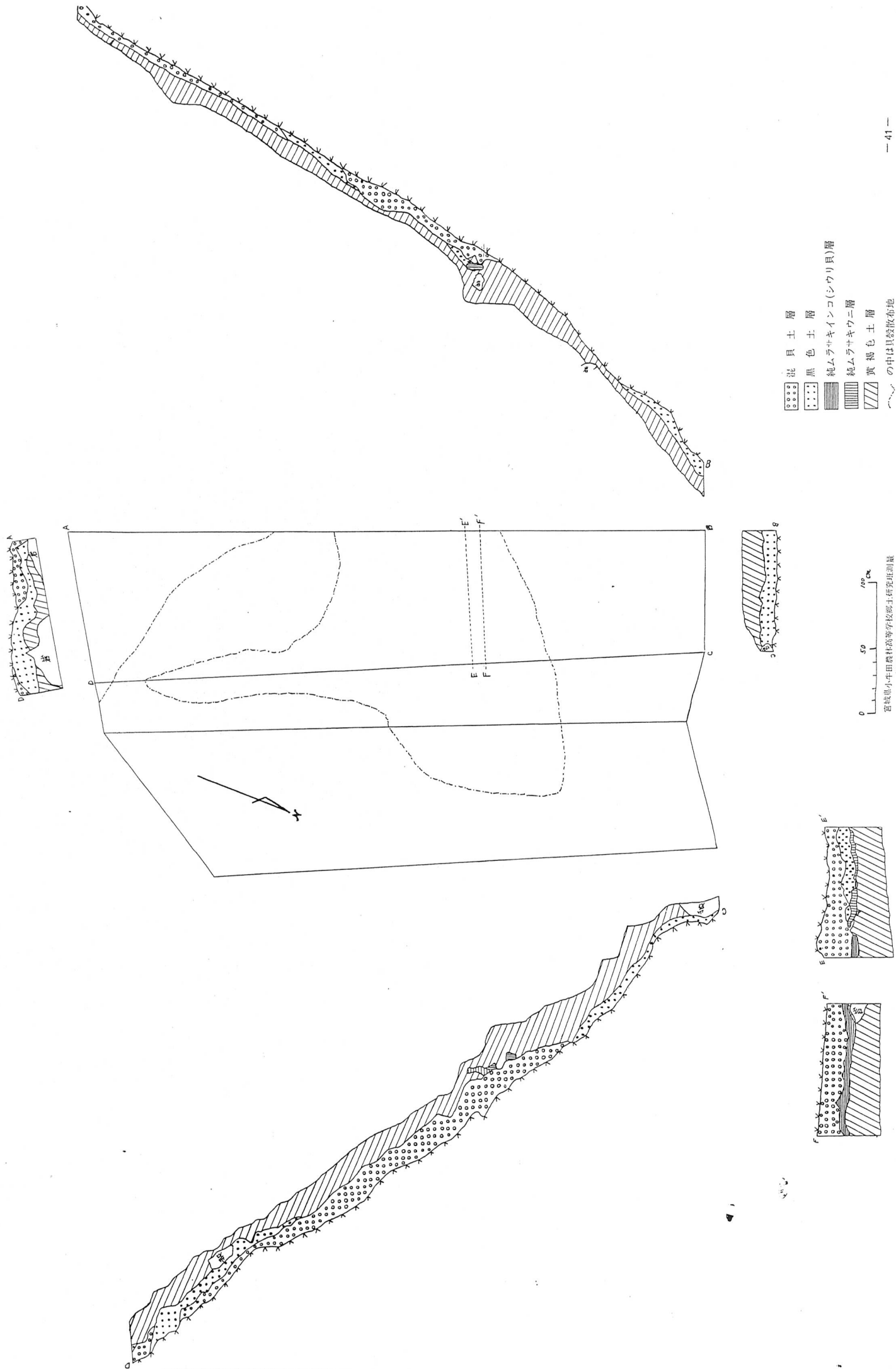
第2日目より、これらの調査と併行しながら加工所の東方約8メートル付近にIIトレンチを設定し、発掘に着手していたが前述の貝層の調査に全力をあげるためには入員の都合上どうしても不可能であった。第3日目に至り、ようやく表土を除去した段階で、このトレンチの調査を打切った。

I'トレンチ貝層の南側には高さ約1メートルの垂直に切り立つ断面が露出している。その上方には約40度の急傾斜面が約25メートルの高さにまで延びている。I'トレンチの貝層は当然この斜面に沿って崩れ落ち、堆積したのであろうから、次の課題はどうしても、この急斜面に目を注ぐことであった。われわれは雑木雑草を、なぎ倒しながら残存する貝層を求めて頂上にまで、よじ登った。上方には遺物は殆どなく、只僅かにI'トレンチの上方に接して長さ約7メートル、巾約5メートルの範囲にわたって土器片、貝殻片、魚骨、獣骨片、骨角器片等の散乱しているのが見られた。当然この部分はI'トレンチの源流と見られるから、この区域に東西約2.5メートル、南北約6メートルのIIIトレンチを設定して調査を進めることとした。この傾斜面は35度、ところによっては55度の急勾配を示しており、ところどころに足場をつくらなければ立つことさえ困難であった。この地点は約7メートルの標高を示し、北西方の海上を広く見渡せる好所でもあ



第4図 第IIIトレンチより北西方海上を望む

出島山下貝塚第Ⅲトレンチ実測図



る。このトレンチの北端部は勿論、Iトレンチに接続するよう設定した。薄い表土を除去し、貝層の調査に着手したが急傾斜面であるため表土同様、貝層そのものも極めて薄く、平均の厚さは僅かに20センチを超える程度に過ぎず、勿論、層位の区分は認められなかった。貝類はシウリカキ、アワビ、オオヘビガイ、ごく稀にハマグリ等が発見されて、この点では前述のI貝層とほぼ同様である。ところがこの貝層の中央部付近を切断して見るとシウリだけが堆積しているところがあった。更にその西方にはムラサキウニの殻及び棘皮だけが他のものを混えずに純粋な堆積を示しているところもあった。このことは、この貝層が原堆積面であることを示すものであろう。この貝層のほぼ全面から凹石がある点、更に打製石斧破片、石鏃、石錘、磨製石斧頭頂部破片、骨角製品破片(?)、骨角製釣針2点等の出土を見た。又径4センチの貝輪状に加工したユキノカサ(貝)が1点発見された。尚このトレンチからも多数の魚骨、獣骨片が採取されたが、これは貝類に比し、魚、獣肉類の消費の割合が多かったことを示しているようである。

IV 出 土 品

1. 自 然 遺 物

① 貝 殻 (第15図)

アワビ マガキ レイシ クボガイ スガイ モモエボラ ミガキボラ イソバンショウ
オオウヨウラク ユキノカサ カモガイ オオヘビガイ ムラサキインコ (シウリ)
アサリ ハマグリ バカガイ 不明1 (17種類)

② 魚 骨 (第17図)

マグロ サメ スズキ タイ

③ 獣 骨 (第17図)

イノシシ シカ

④ 鳥 骨 (第17図)

カモ ガン

⑤ そ の 他

オオウミガメ ウニの棘皮・骨板その他 (第16図)

2. 土 器 (第18図～第26図)

比較的大形の破片として発見された1点の片口土器を除き、他はすべて小破片として発見された。これらのうち、堀の内式に属するものが圧倒的に多く、大木10式がこれに次いでいる(堀の内式47%、大木10式24%)。従って、この二形式が本貝塚出土土器の大半を占めることになる。更に大木5式6%、大木8A、B式併せて6%、加曾利B式は15%を占めているが、これが本貝塚における時期的最下限を示す土器となっている。これらのほか小破片数点に過ぎないが、早期末又は前期初頭に当る上川名式が混入している。

これらの破片によって文様、器形等を推測するに上川名式には羽状縄文、斜行縄文が併用されており器形は、くぼみ底で砲弾状に近い深鉢形を呈しているもののようである。器質は多

量の禾本科植物性繊維を含み、砂粒も多く混入し焼成は不良である。

大木10式には口頸部と胴部の間に鳥環骨を以て付したと思われる一条の列点を等間隔にまわしている。あまり撚りの、かからない縄文を回転しているが縄文は一般に整っていない。又ところどころ条線によって窓状に区切っているのが目立つ。器形は殆んど深鉢、浅鉢と推定されるが注口土器小破片1点が含まれている。器質は雲母、石英、砂粒等が多量に含入しており、焼成も至って不良である。

堀の内式に属するものは山形突起を取り付け、口縁内外に擦り消しを施したものが多い。又2個ないし3個のボタン状のくぼみを縦位に付し、隆帯、条線で文様を区切っているものが多い。中期からの延長で縦位の縄文が残るが、縄文は一般に非常に乱雑である。器形を推量するに口縁部は幾分外反し胴張りの傾向があるらしい（殆んど深鉢、浅鉢と思われる）。底部は後期の伝統で土製円盤を貼り付けたものが多い。従って底面が分離し散乱している場合が多い。

なお、破片中に楕目状の条線を付したものが少量見受けられた。

加曾利B式は本県では宝ヶ峯式に併行する。本貝塚出土の破片を見るに口唇部は平らで羽状縄文、斜行縄文が復活し、横位の条線で文様帯を区切っているものが多い。又研磨文のある破片も見られている。この時期の特徴として器形の分化があげられるが破片から推量するに本貝塚の場合は鉢形であろう（深鉢、浅鉢）。

3. 石 器

① 石 鏃 (第27図)

三角形を呈し、扁平で基部が湾入している。他の二辺は幾分膨らみを持っている。チャート質石材を使用し、打製である。長さ2センチ。後期の特徴を示している。Ⅰトレンチ出土。

② 石 鏃 (第27図)

完形品でないため正確なことは不明であるが、三角形を呈し三辺とも多少膨らみを持っていたと推定される。黒曜石を使用し、打製である。長さ1.5センチ。前者と同時期と考えられる。Ⅲトレンチ出土。

③ 磨製石斧 頭部 (第28図)

Ⅲトレンチ出土のもので頭頂部のみ残存している。磨製の二等辺三角形蛤刃の定角石斧であろう。

④ 磨製石斧 頭部 (第28図)

磨製の定角石斧の頭部破片である。これは折れた破片を更に縦に割り、刃をつけて使用したものであろう。巾の広い部分に鋭く刃を付けたあとが認められる。Ⅲトレンチ出土。

⑤ 打製石斧 頭部 (第28図)

現在における長さは約10センチで玄武岩を使用し、打製である。断面は楕円形を呈している。Ⅲトレンチ出土。

⑥～⑩ 方孔石 (第30図)

径4センチ位の黒色砂質粘板岩の丸小石で、中央部に6mm×7mmの長方形の穿孔を有している。これらと同類のものは本島の汀線付近でしばしば発見される。地学専攻者の教示によれば、これらは自然発生的なものらしいという。しかし、これらが包含層から発見される以上、何かの目的に使用されたと見てよいであろう。しかも現在、汀線付近で発見される同類のものは大きさ形状も種々であるが、包含層から発見されるものは径約4センチ位の丸小石であり、又重量も17～18グラムと殆んど一定している。そこには規格性があり、ほぼ同一規格のものを選定しているように思われる。魚錘として使用されたものであろうか。

⑪～⑬ 凹石 (第29図)

拳大の自然石の、ほぼ中央部に凹又は打痕を有するもので形状は種々であるが底面が平らで坐りのよいことが特徴である。凹又は打痕と思われるものが中央部に一箇所あるもの、表面二箇所にあるもの、更に裏面にも見られるものなどがある。これらの石材は永年にわたり海水に洗れた形跡があるから、おそらく汀線付近から拾い上げ使用したものであろう。単なる打石器か発火用具か判明しない。

⑭ 有孔円形石盤破片

小破片のため詳細は不明であるが径8センチ、厚さ1.7センチ位と推定される円形石盤の中央部に径1.3センチの孔を穿ったものである。表裏面には荒い手法ではあるが平らにするため手を加えたあとが認められる。用途等詳細は不明である。

4. 骨角器 (第31図)

① 釣針 (第32図・第34図)

Iトレンチ貝層より出土したもので鹿角製である。長さ5センチで内側に逆刺がつけられている。全体が入念に研磨され、つくりは精巧である。この釣針の曲りは鈍角の部類に属する。

② 釣針 (第32図)

IIIトレンチ貝層出土のもので①同様鹿角製である。長さは5.5センチで逆刺はなく針が上下につけられている。この釣針の曲りも鈍角の部類に属する。

③ 釣針 (第32図)

IIIトレンチ貝層出土のもので鐮形を呈し、鹿角製である。長さは4.5センチで先端部には径3ミリの穿孔がある。針の先端が僅かに欠損している。つくりは前二者に比し、やや粗雑である。

④ 組合せ式釣針

基部が欠損し、現在における長さは6.3センチであるが元来は7.5センチ位と推定される。巾は約1センチで先端は篋状に丸く加工され、全体に磨痕、擦痕が顕著に認められる。イノシシの牙を縦割りにして加工したもので頗る堅牢である。Iトレンチ出土。

⑤ 組合せ式釣針

マグロの背椎骨を用いて細身に仕上げているが特に先端を鋭利に加工している。表面には研磨の跡を明瞭に残している。先端部、基部とも幾分欠損している。現在における長さ5.5センチ。Ⅰトレンチ出土。

⑥ 組合せ式釣針

マグロの背椎骨を用いて⑤より更に細身に仕上げ、先端を鋭利に加工している。表面には加工の際の研磨の跡が顕著に残っている。現在における長さは6.5センチであるが基部、先端部とも欠損している。Ⅲトレンチ出土。

⑦ 銚 (第33図)

Ⅰトレンチ貝層出土のもので鹿角製である。基部が僅かに欠損しているが、全体の長さは7センチ位と推定される。一方の脚の先端部が僅かに欠損している。固定式の銚の一種である。

⑧ 銚 頭

マグロの背椎骨を加工したもので両面とも入念に研磨している。小破片であるため正確なことは不明であるが、おそらく細長い脚を持ち鏃のような形態を呈していたと推定される。径6ミリの孔が穿たれている。離れ銚の銚頭であろう。Ⅲトレンチ出土。

⑨ 骨 匙

シカの蹠骨を半截加工して筵状につくりあげている。先端は扁平に加工し、使用痕が認められる。基部が欠損しており現在における長さは約7.5センチであるが元来は9センチ位と推定される。巾1.7センチ、先端部の巾は1センチ位である。Ⅰトレンチ出土。

⑩ 牙 鏃

イノシシの牙製鏃と推定される。先端は丸く、扁平に仕上げられ、基部は先尖り状に加工されている。嵌め込み式鏃であろう。片面に擦痕が認められるが加工の際の痕であろうか。Ⅰトレンチ出土。

⑪ 鹿角製品破片

鹿角を縦割りにして加工したもので表面には磨耗痕、基部には截断痕が認められる。現在における長さは7センチ、巾2.8センチ、先端部が欠損している。柄であろうか。Ⅲトレンチ出土。

5. その他の出土品

①～⑨ 土 錘 (第36図)

土器片の周囲を打ち欠き、更に研磨して径3.5センチ位の円盤状に仕上げたものである。これらにも大小の差は多少あるが、ほぼ同大といってよく、規格性が見られる。糸掛けと思われる小突起を残しているものがあるので土錘とする説もあるが突起のないものも、それと同数発見される。用途については更に検討の必要であろう。なおこれらの土製品は一時期前の土器片を使用しているとの説もある。

⑩～⑫ 垂飾具 (第35図)

長径4センチ位のユキノカサを加工し、貝輪状に仕上げたものである。内径はいずれも3センチ位で切断面はよく研磨されている。貝輪の常識から考えれば余りにも小さ過ぎる。従って1個又は数個を紐に通して垂飾具として使用したものであらうと考えられる。静岡県西貝塚(後期)の出土品に類例が見られる。I、IIIトレンチ出土。

⑬ 貝斧 (第37図)

カキ殻の両側面を削りとり貝斧として使用されたとする説がある。このカキ殻の両側面には、削いだ跡が認められる。縦9.8センチ、巾5センチ。

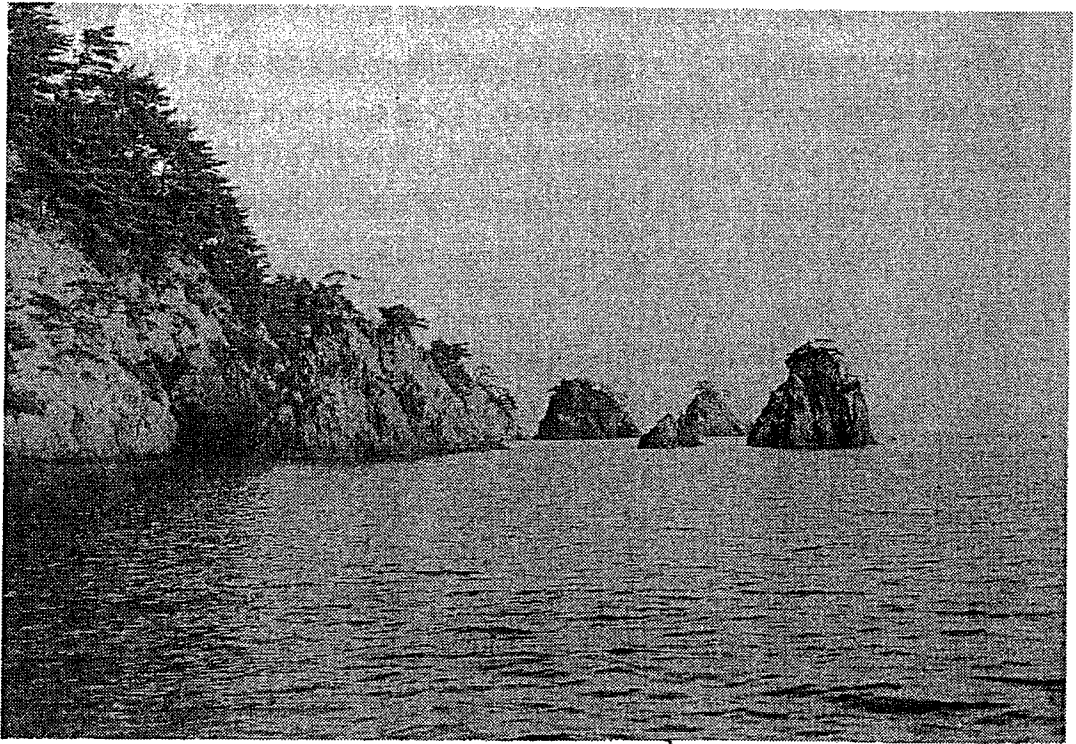
⑭ 貝鋸 (第37図)

9.4センチ×7.5センチ位の厚目のカキ殻であるが、その一方の側面には鋭いギザギザがある。従ってこの部分を鋸として使用したものであるとする説がある。他の側面(手持つ方)には削いだ跡が認められる。

V 考 察

前述のように(出土品——1.土器の項)本貝塚出土土器のうち数量から見て首座を占めるのは堀の内式(南境式)で大木10式がこれに次いでいる。更に大木5式、大木8A、B式は各々6%、大木2A、B式と思われるものは僅かに破片1点に過ぎず、形式分類上からも疑問が残る。加曾利B式は全体の15%の比率を占めている。従って本貝塚は縄文文化時代後期を中心に形成されたものと考えられる。そして加曾利B式(宝ヶ峯式)は本貝塚における時期的最下限を示す土器ということになる。又本貝塚は大木のうち数形式を欠いている。これは、それらの期間だけ人々の生活の営みが断絶したと見るべきではない。当然すべての形式があったのであるが、津波等の災害により、それらの遺跡は消滅してしまったものと考えなければならぬ。この貝塚からは少量ではあるが上川名式に併行する遺物が発見されている。更に土師器、須恵器片等も島民によって発見されているから、縄文文化時代早期末より歴史時代へかけて断絶することなく人々がこの台地上に居住していたと見なければならぬ。配石遺構群も貝塚も、それらの人々が、その発展の過程において残した一駒一駒としてとらえられると思う。

本貝塚に見られる貝類は17種類に及ぶが数量は極めて少く従って貝塚の分布範囲も至って小面積である。前述の通り貝類はカキ、アワビ、シウリ等を主とし、それらに混ってオオヘビガイ、レイシガイ等が若干見られ、ハマグリに至っては僅かに二、三を数えるに過ぎない。これは勿論当地方が「リアス式海岸」の名称を以て呼ばれるように急崖が直ちに海に迫り文字通りの岩石海岸をなしている結果である。すなわちカキ、アワビなど岩石海岸に生息する貝類が首座を占め、遠浅泥質の砂浜を育成地とするハマグリは殆ど育たなかったことによる。まして淡水の流入する河口等を育成の好適地とするシジミなどは皆無ということになる。現在の出島においても砂浜は僅かに二、三を数えるに過ぎない。しかも、それらは至って小規模で付近を航行の際、注意を怠ると見落してしまうような状況である。とにかく貝層の貧弱なことは最も目立つ特徴で豊富な貝



第6図 遺跡付近に展開するリアス式海岸の風景

殻の堆積が見られる松島湾沿岸における貝塚とは到底比ぶべくもない。出島から雄勝までは約1時間20分の航程である。この間沿岸の各地に貝塚が見られるが、いずれも小規模で貝塚の名称を以て呼ぶことに躊躇する程である。特に本貝塚の場合は貝殻の分布範囲が狭いばかりでなく、貝層も極端に薄く、すべて混貝土層の状態で層位の区分などは全く不可能であった。しかし、貝塚の数は多く、小規模のものが近距離の間に点在している。これは断崖が直ちに海に迫る不整地が多いため人々が僅かの好所を選んで分散居住した結果であろう。

又これらの貝塚が殆ど同様の海拔高度を示していることも特徴としてあげられる。すなわち本貝塚は現状から判断すると、その主要部は元来、海拔20メートル付近に位置していたと思われるが当地方における貝塚は概ね18メートルから30メートルの標高を示しているものが多い。例外もなくはないが米子立貝塚をはじめ立浜貝塚、雄勝町の天雄寺貝塚等すべて近似する海拔高度を維持している。これは勿論、或る程度の高所を選んで生活の本拠としたことであって、土木

技術の発達を見なかった縄文時代人が津波等の海難を避けるために案出した一つの生活の知恵であつたろう。

次に貝殻と魚骨、獣骨片の出土の割合を見ると貝殻に比し、魚、獣骨片の出土量が目立って多いことに気付く。これは勿論、魚・獣類特に魚類が多く捕獲され、食用に供されていたことを物語るものであろう。この地は三陸の漁場の延長である。現在、本貝塚から出土する魚骨片は当時この地がカツオ、マグロをはじめとする豊富な魚族資源に恵まれていたことを容易に想像させるものである。又背後の山地からはイノシシ、シカ、クマ等の豊富な動物資源を得ていたのであろう。これらは貝類の不足を補って余りあるものであつたろう。

次に米子立貝塚との関連について一考しよう。米子立貝塚は、山下貝塚の反対斜面にある。すなわち半島状台地の南側斜面を占めている。そうすると一つの半島状台地の南北両斜面にそれぞれ貝塚が形成されたことになる。南側斜面を占める米子立貝塚は北側斜面にある山下貝塚に比較すれば規模も大きく、貝層も厚い。その比率は7:3位と考えられる。この台地上は平坦で現在は畑地として耕作されているが、その面積は約19アールに及んでいる。しかも、この平坦面自身遺物包含層をなしている。おそらくこの平坦面に縄文前期から後期へかけて住居が営まれ漁労、狩猟等による生活が展開されていたのであろう。そして前期・中期には残滓物が南側の米子立へ向って投棄され、いわゆる米子立貝塚を形成することになったのであろう。そして後期を中心とする時期には残滓物は主として北側へ投棄され、本貝塚の形成を見ることになったのであろう。しかも南斜面より遙かに急な傾斜を示す北側においては投棄物が途中で殆ど滞留することなく下方に転落してしまい僅かに凹面を残していたⅢトレンチ付近には或る程度の堆積を見たのであろう。又この台地上に居住した人々は遺跡の規模から見て多人数ではなかったと推定される。殊に縄文後期においては小人数による小集落に過ぎなかったことが想像される。

なお、第ⅢトレンチのD-C切断面を見ると、その東半にはウニの小堆積が見られ、西半部にはシウリの堆積が見られる。この部分は本貝塚において同一種類の貝殻のみが純粋な堆積を見せている唯一の部分である。殊にウニの場合は多くの骨板の中に混って多数の棘皮が一本一本原形のまま残存している。(これらは現在においても、ホヤと共に、この地方における7月から8月へかけての重要海産物である。)これらの小型或いは微細な残滓物が20数メートルの高所から急斜面を転落して、偶然この地点にまとまって辿り着き堆積したとは到底考えられないから、或る時期にまとめて、この地点に放棄されたものと思われる。そうすると、この斜面の中腹にまで持ち運んで来て、まとめて捨てることはあり得ないから、この斜面の中腹にも小人数が居住していたことが考えられる。おそらく、その人々は、この傾斜面下の小湾を利用していたのであろう。

次に台地上にある配石遺構群との関連について一考しよう。この台地上には、いわゆる「出島配石遺構群」がある。台地上平坦面の最高所に位置を占めⅠ号、Ⅱ号の2群から成っている。縄文文化時代後期から彌生式文化時代に至るまでの土器、石器を出し、一応の調査を終っている。又最近では、この台地の南側斜面に小型石材を帯状に積築して山腹を取り巻くように配置した特殊な石垣状遺構も発見された。後者の性格は目下のところ必ずしも明らかではないが前者と同時期

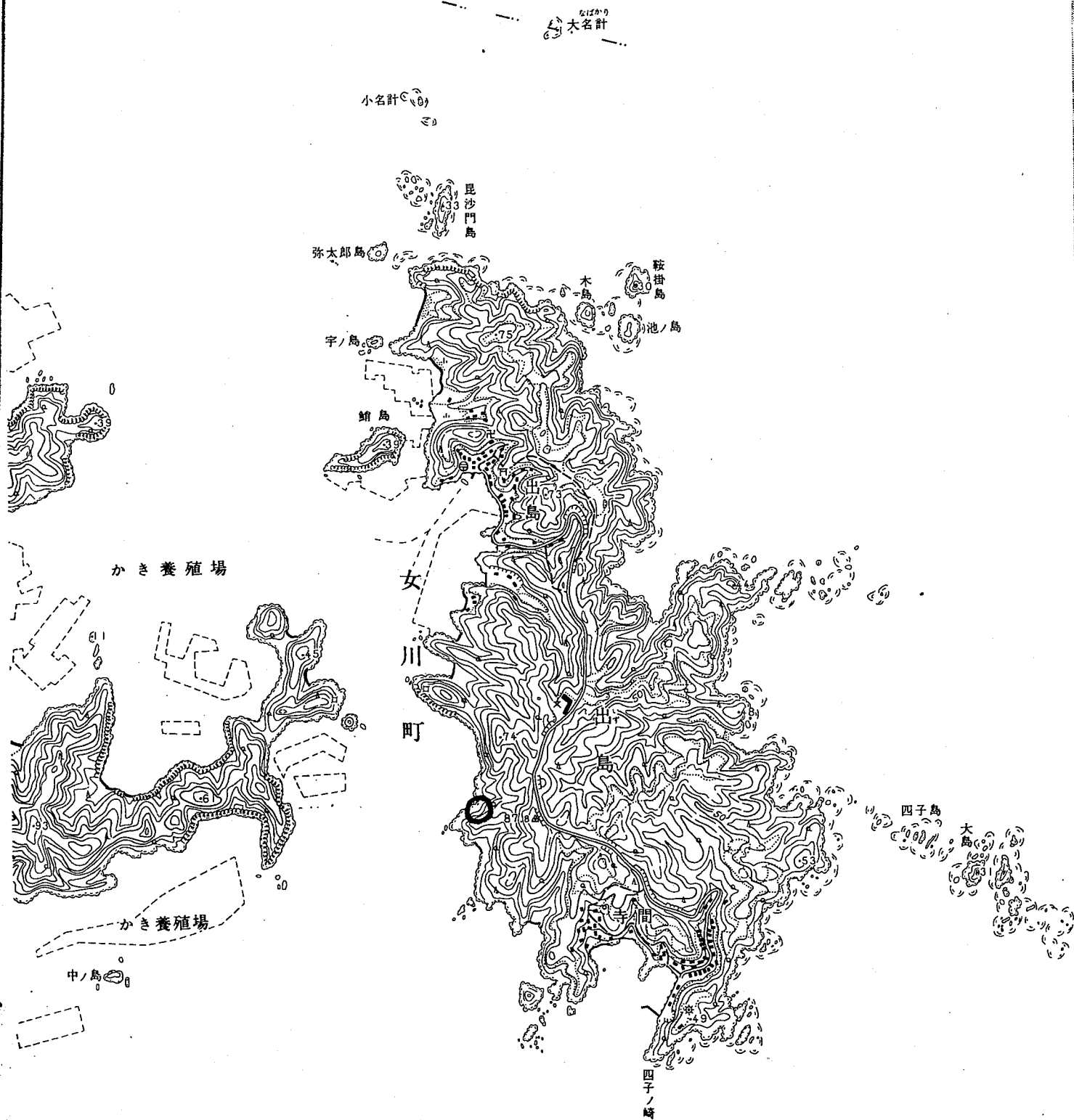
の配石遺構群であることは疑いなく、当然これらの遺構群と本貝塚との関連が問題になって来る。出土土器の編年上からは山下貝塚がこれら遺構群と時期を共にしている。又位置を見ても両者は至近距離を以て互に接近している。このことから両者間には密接な関連があることを思わせられるが、しかし、これまでの資料だけを以て直ちに両者を結び付けることは不可能である。

付 記

当方面における遺跡の現況

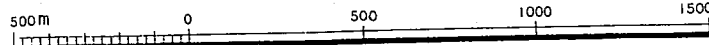
最後に出島を中心として女川湾、御前湾、雄勝湾沿岸方面における遺跡の現状に触れることにしよう。三陸沿岸地方は人も知る避達の地である。古来、文化の光は容易に到達せず、現在においても複雑な地形に阻まれて、交通は充分な発達を遂げているとは申せない。このような避地性のためか当地方における遺跡は従来余り省みられず調査等は殆ど行なわれていないのが実情である。殊に出島をはじめ女川湾、御前湾、雄勝湾沿岸地方は考古学の面からは殆ど日の当たらない地域として残されていたといっても過言ではない。幸か不幸か、このような避地性が、この地方の遺跡をこれまで一応保護して来たといえる。ところが最近に至り開発の波は、この地にも押し寄せ目下急テンポで現状の破壊が行なわれている。前述の水産加工所設立のための土地造成などもその好例であり更には道路の開発、舟発着場の拡張工事、耕地の開墾等、新たな空間を求めて自然の破壊は容赦なく進められている。遺跡の危機は、すでに、この地にも迫っている。従来は後進性が、この方面における遺跡を保護して来たといえるが現状では、そうはいえなくなった。この方面における遺跡は未調査のまま永遠に葬り去られようとしている。地元民の文化財に対する不認識は、ますますこの傾向に拍車をかけている。「文化財保護」の問題は、もはやこの地においても緊急の課題となりつつある。

第7図 出島全図

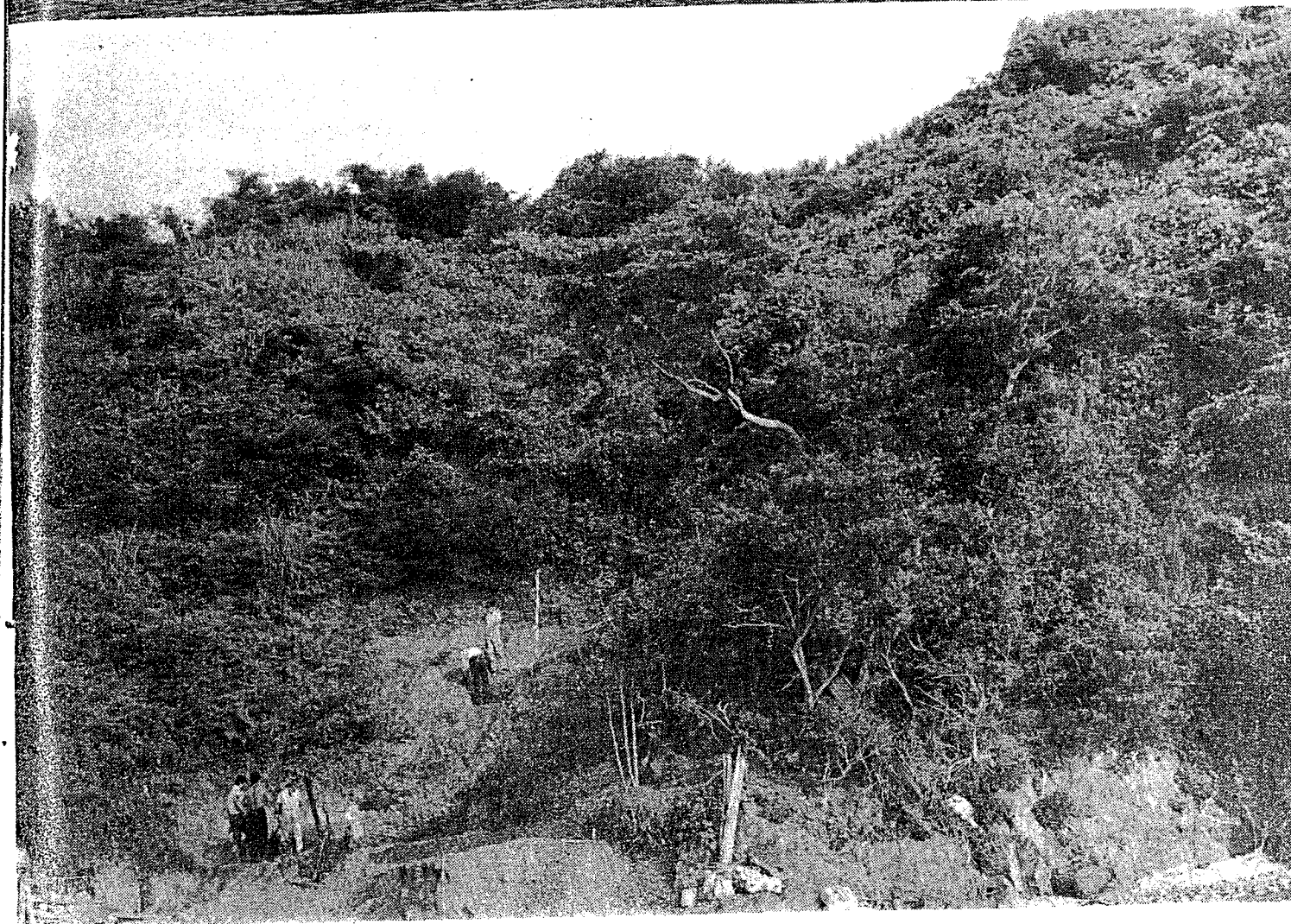
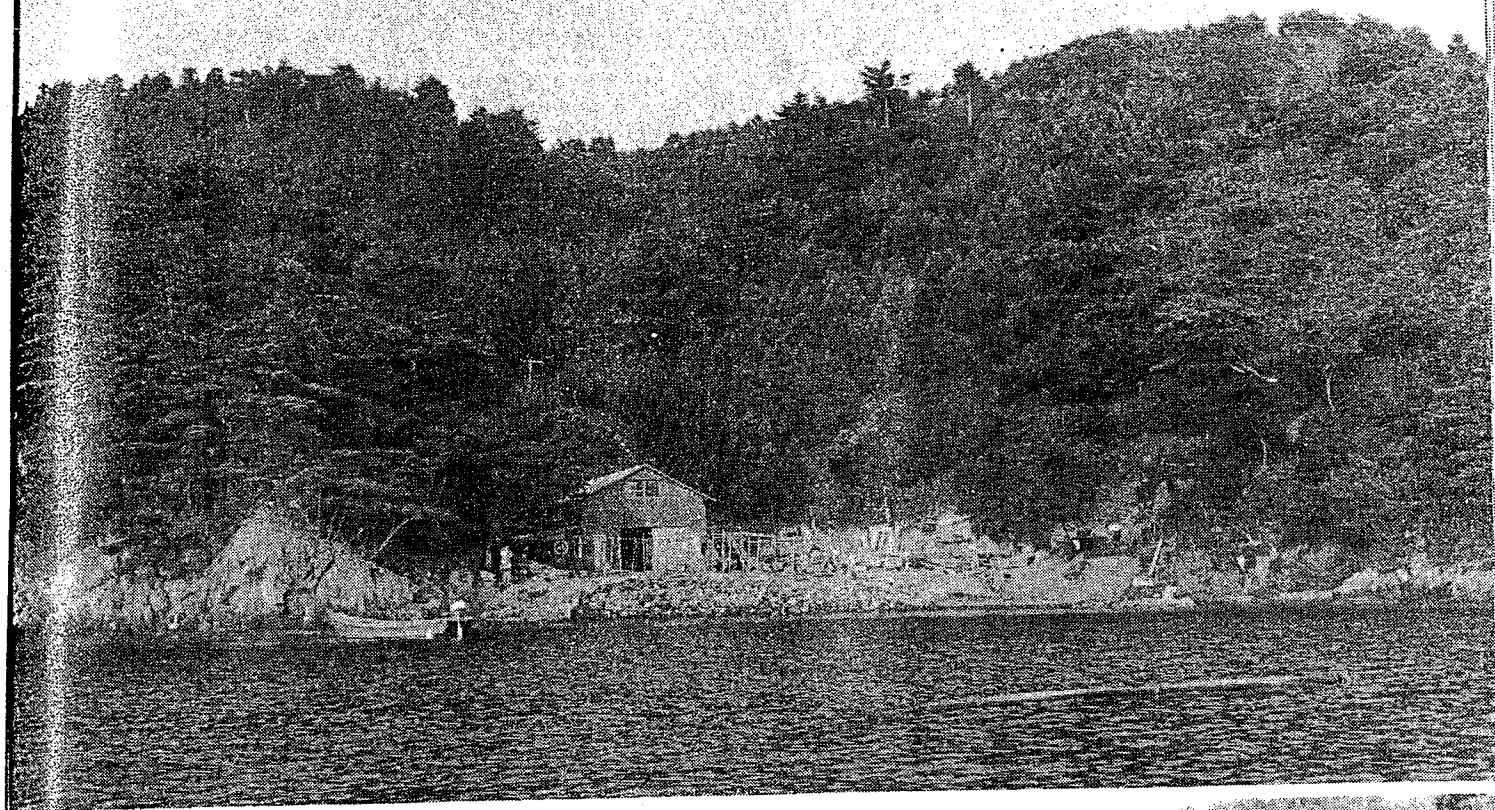


○は遺跡を示す

出島



(国土地理院発行
「出島」より転載)

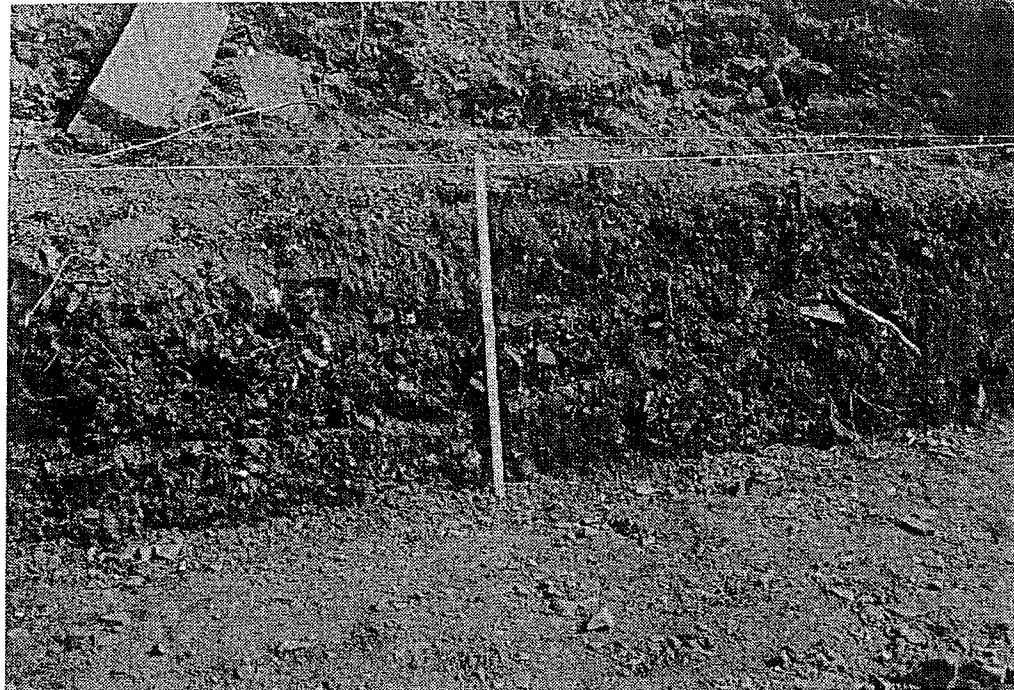


第8図 ㊤ 遺 跡 遠 望 (遺跡は水産加工所の右方，傾斜面下にある)

第9図 ㊤ 遺 跡 全 景

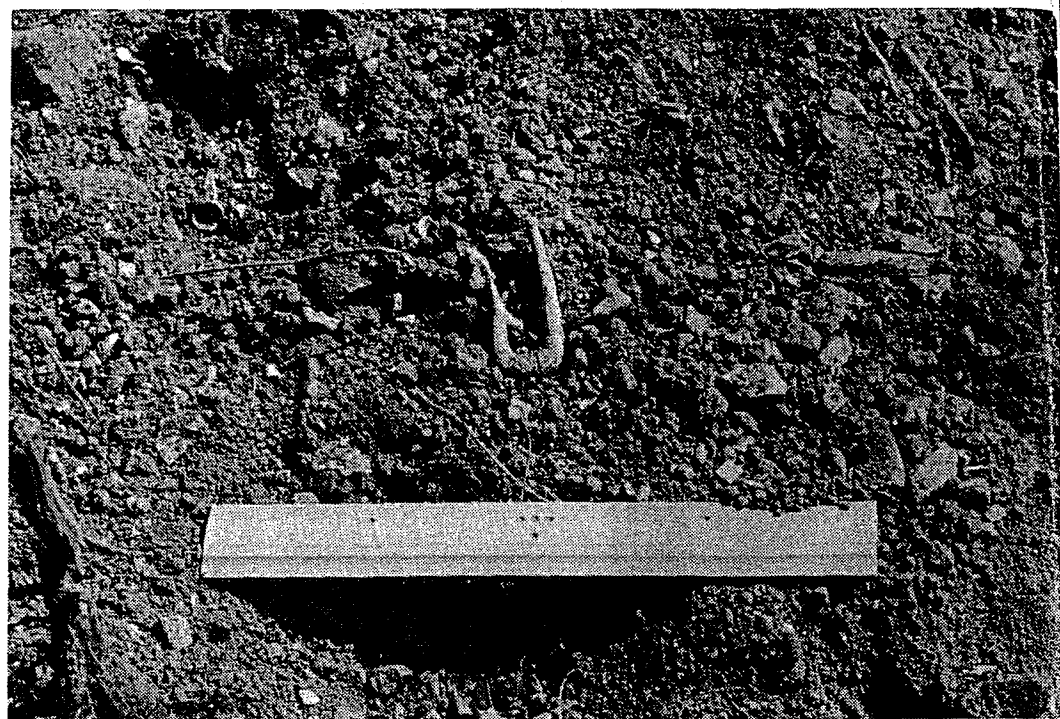
第10図

Iトレンチ貝層の一部



第11図

釣針出土状況



第12図

土器出土状況



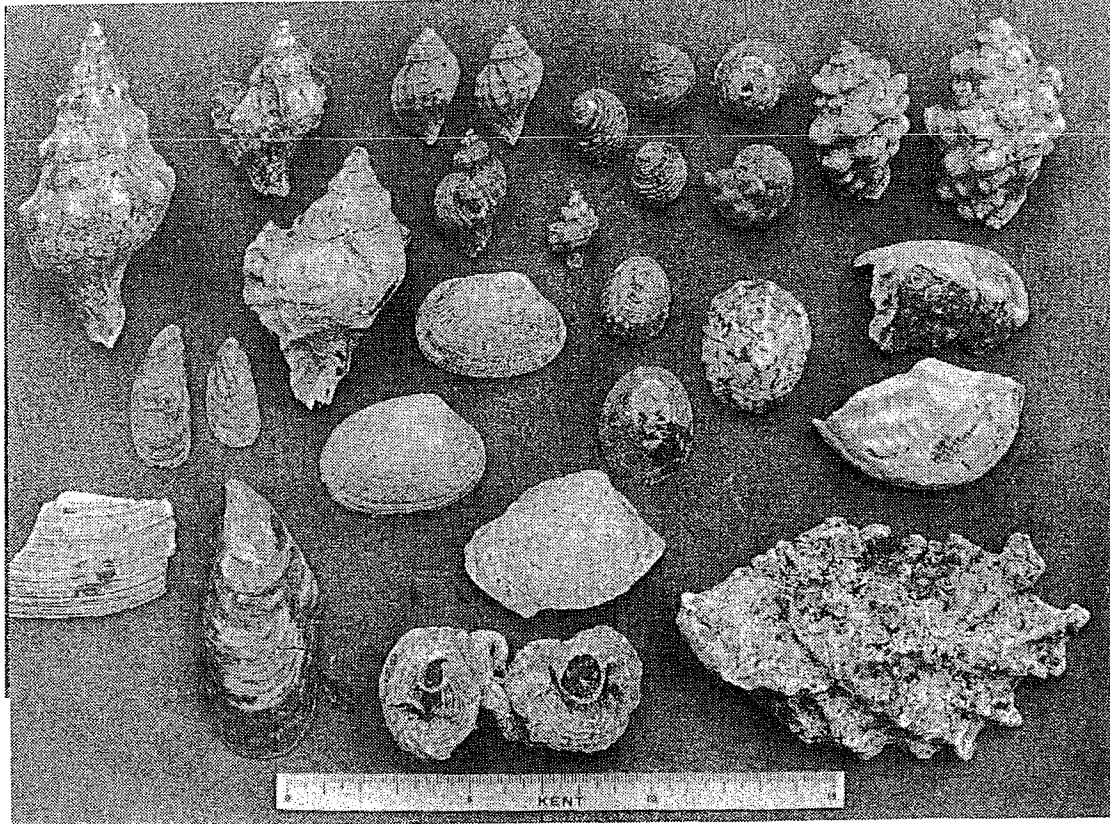


第13図 ㊤ IIIトレンチウニ・シウリ層断面 (↑シウリ・↓ウニ)

第14図 ㊦ IIIトレンチ貝層の一部

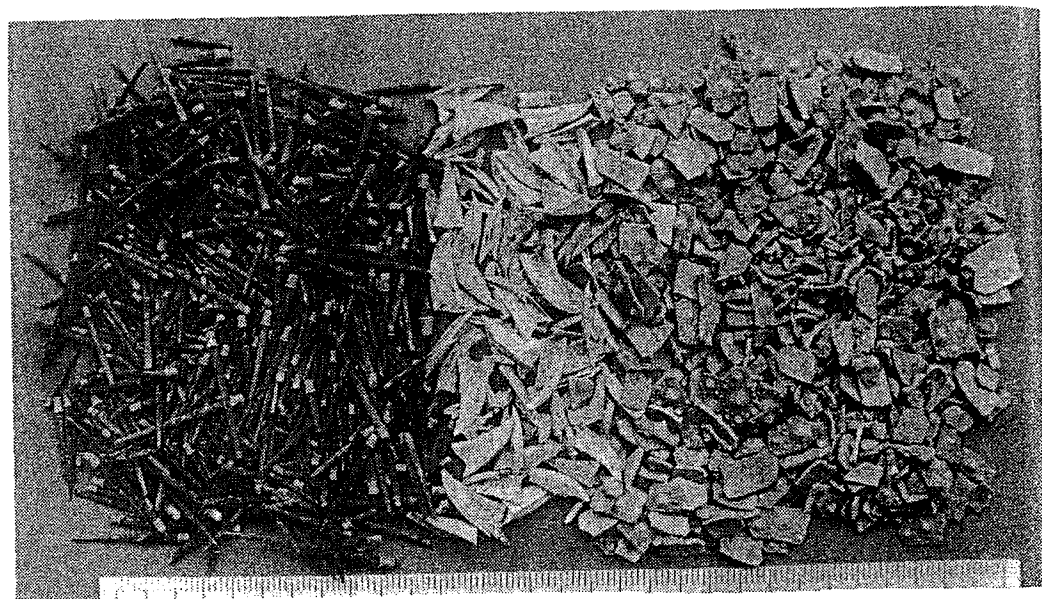
第15図

出土貝類サンプル



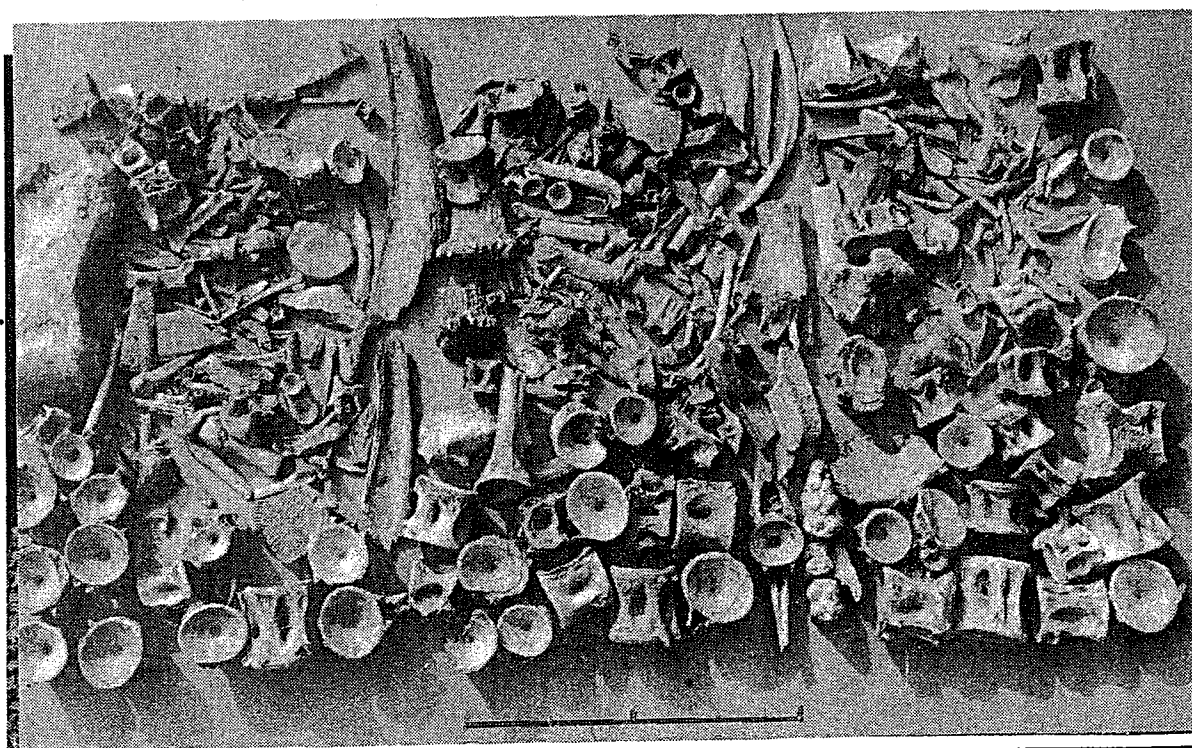
第16図

検出されたウニの棘皮・骨板その他

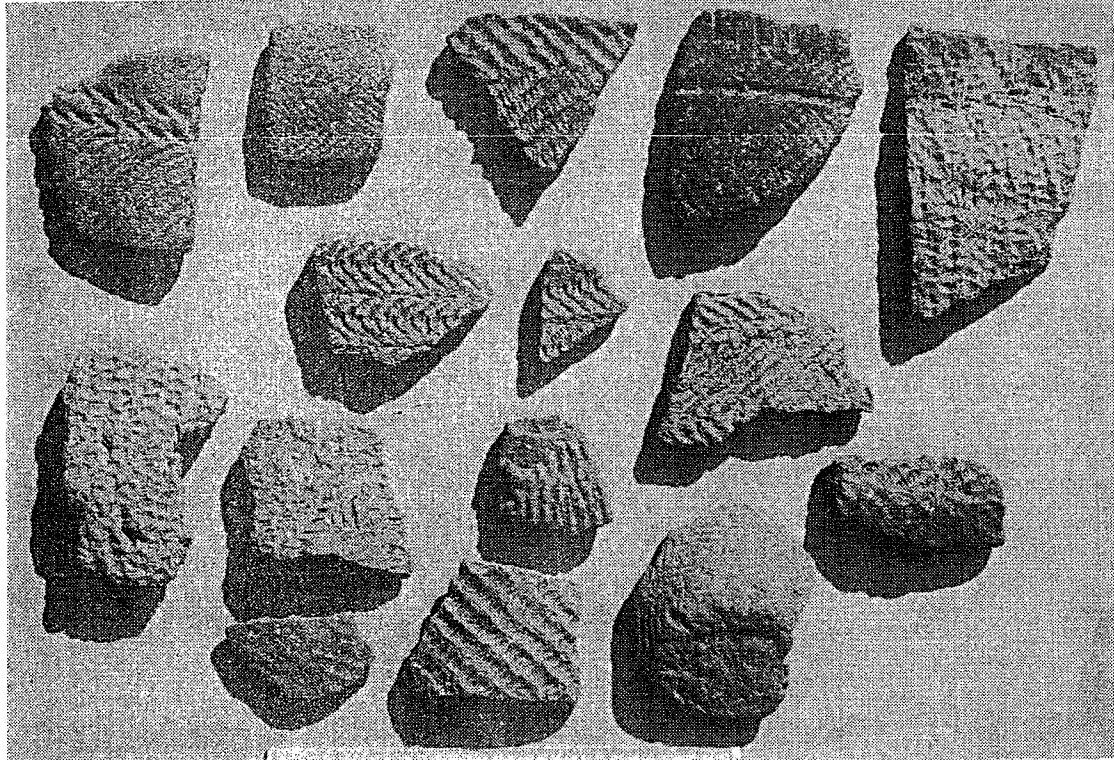


第17図

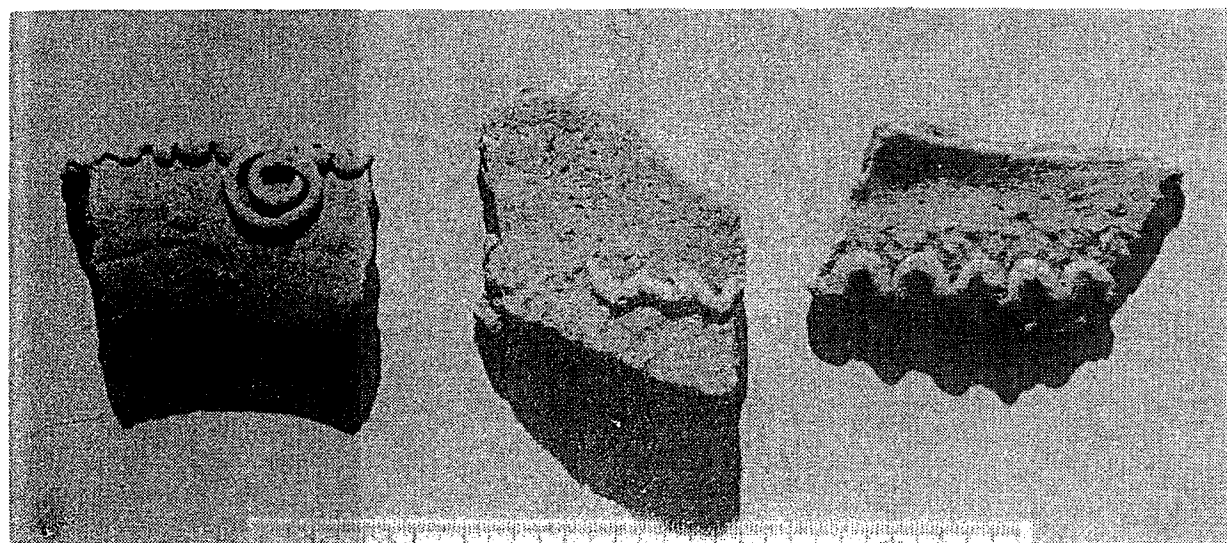
魚・獣・鳥骨類その他



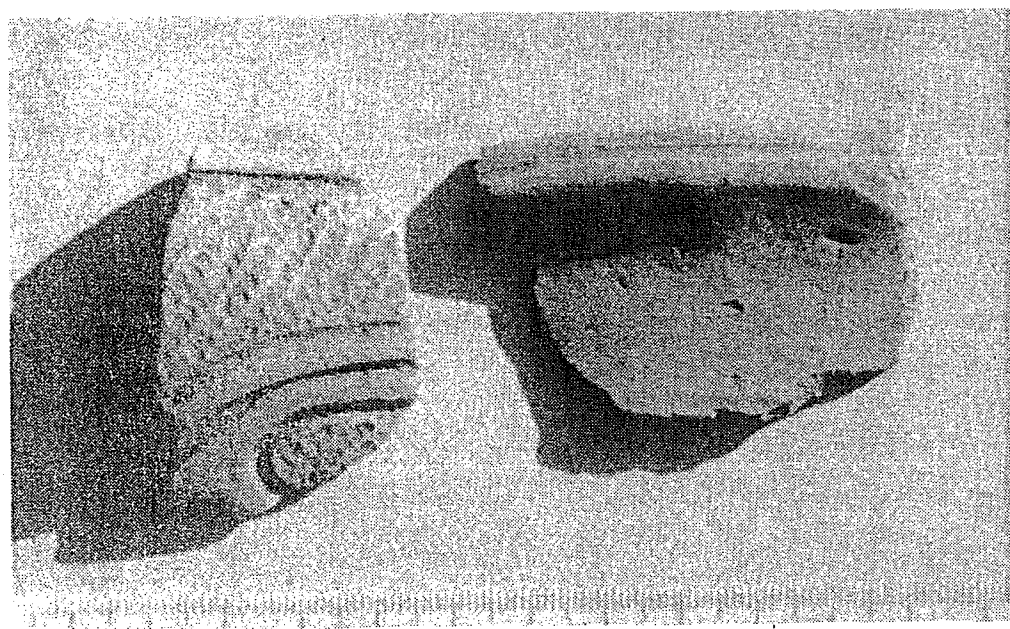
第18図
土器

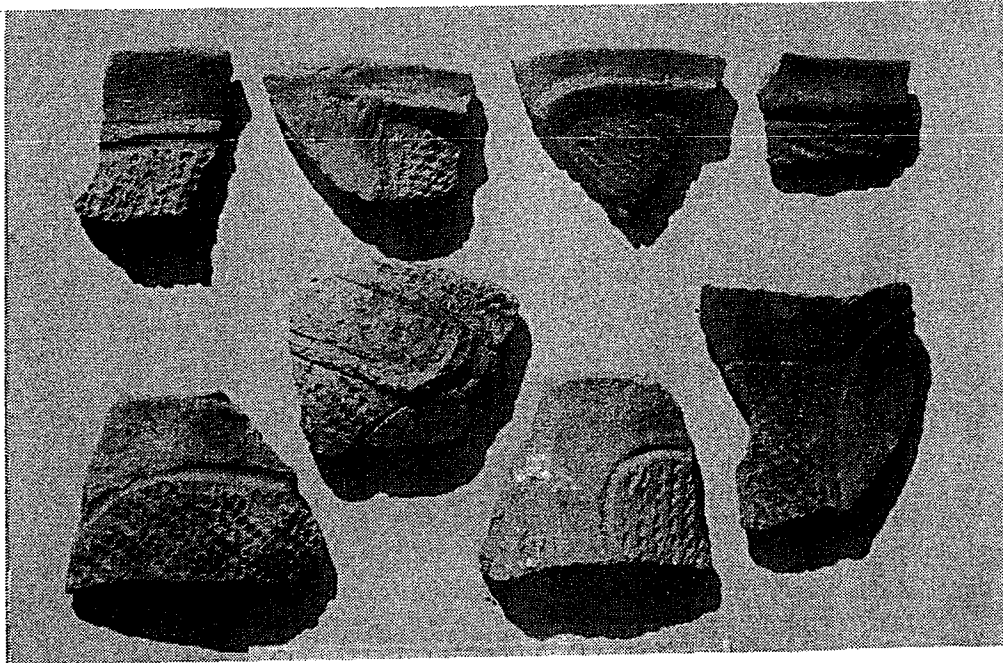


第19図
土器

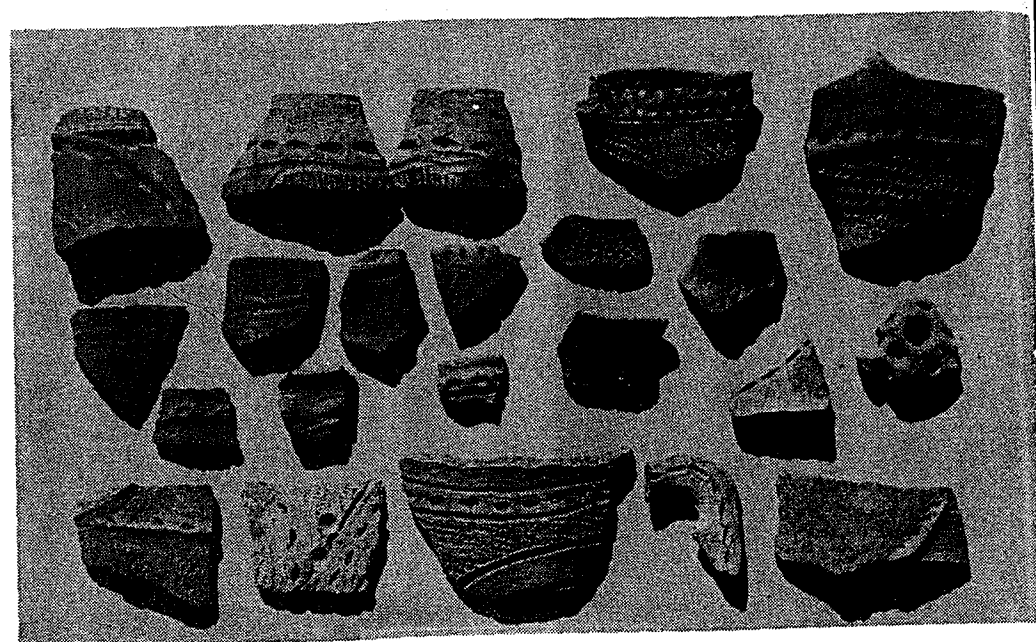


第20図
土器





第21図
土器

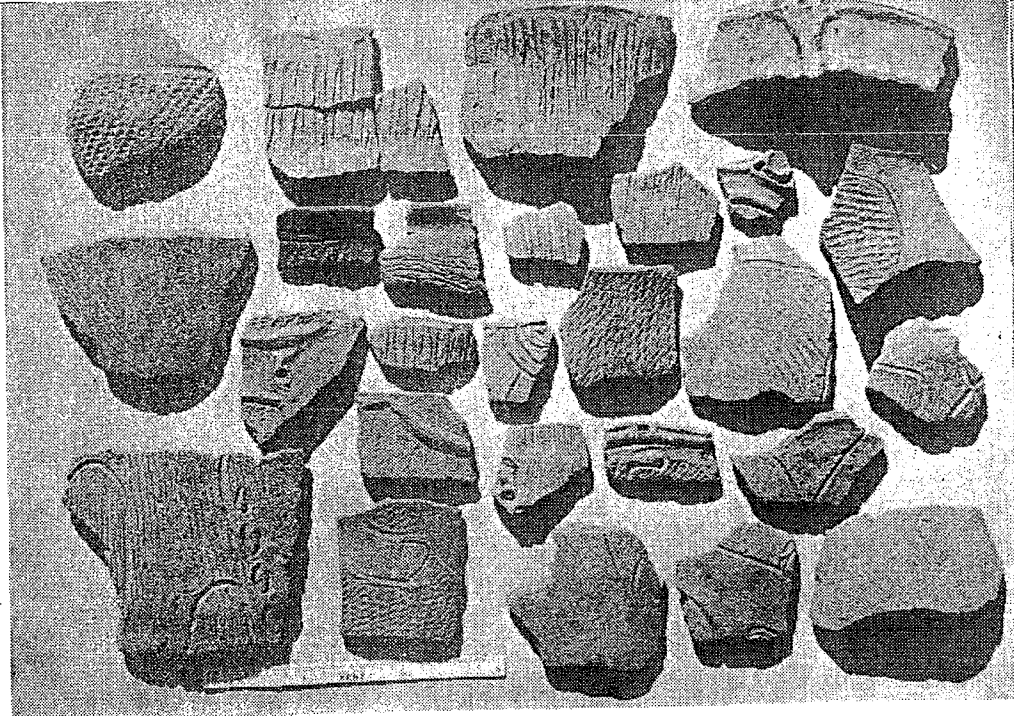


第22図
土器

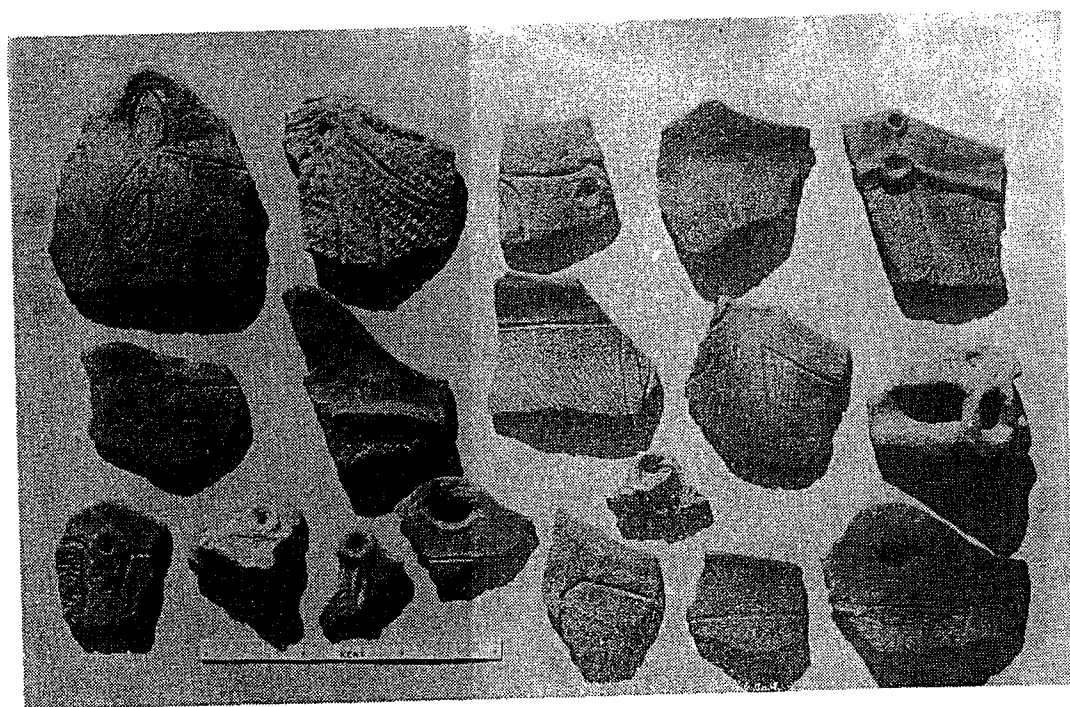


第23図
土器(片口土器)

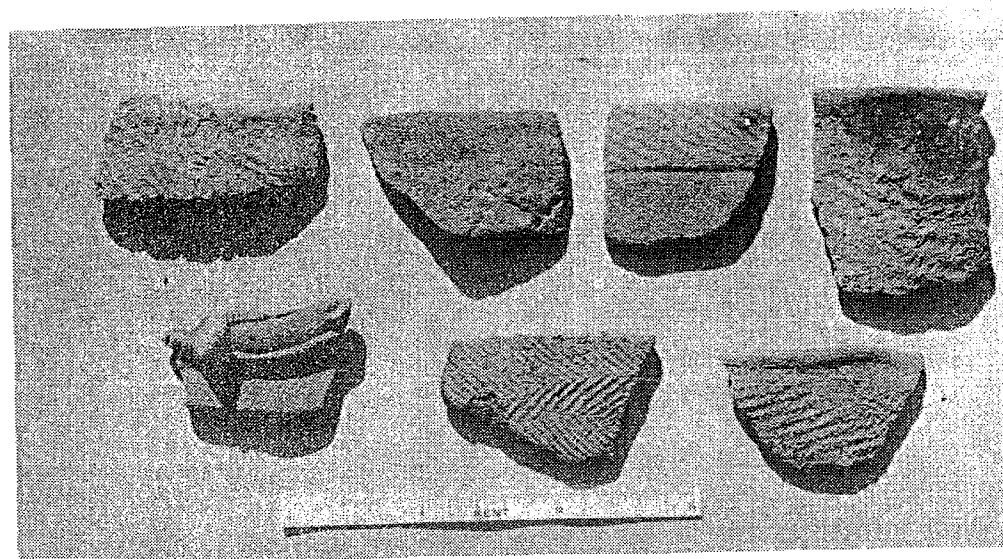
第24図
土器

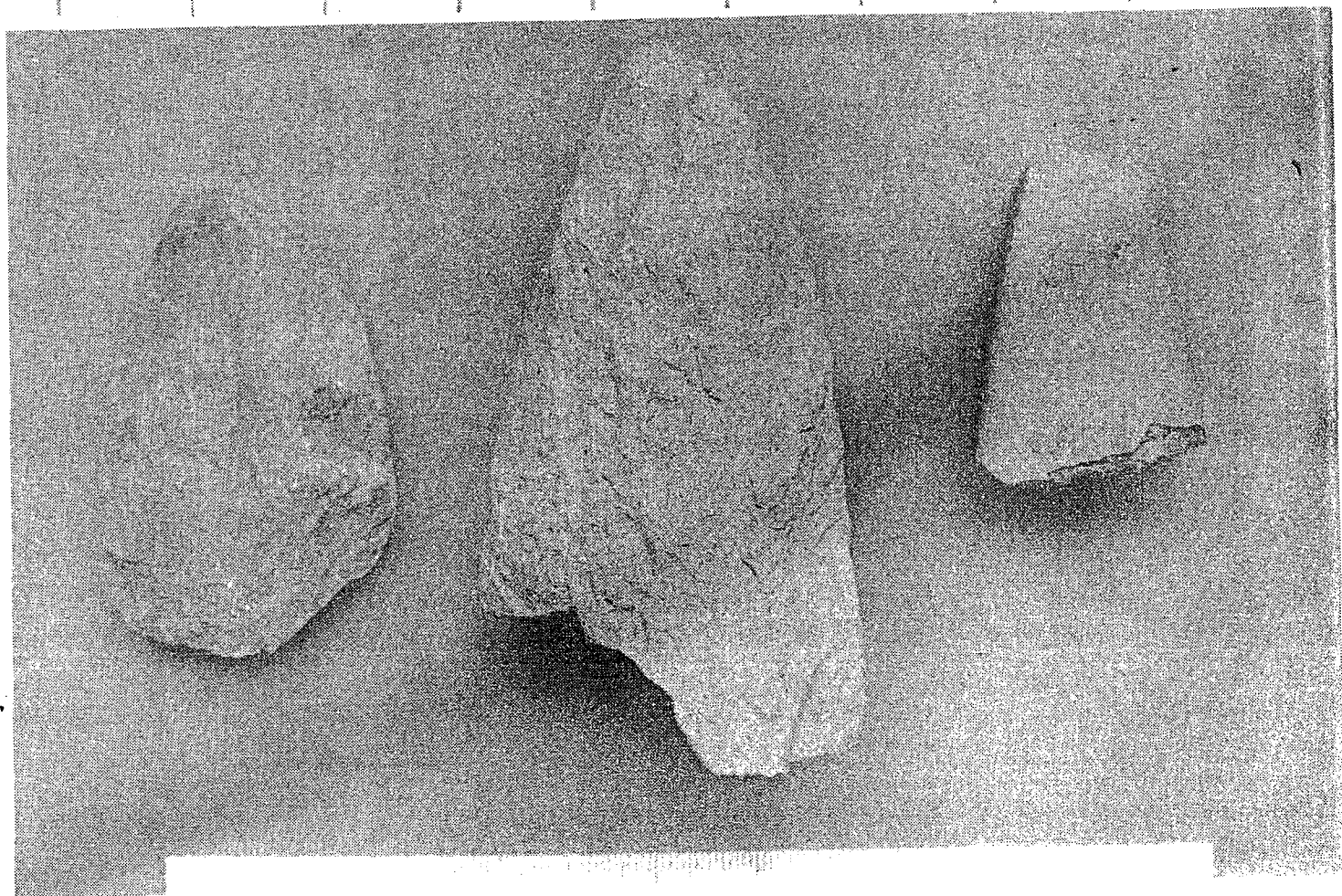


第25図
土器



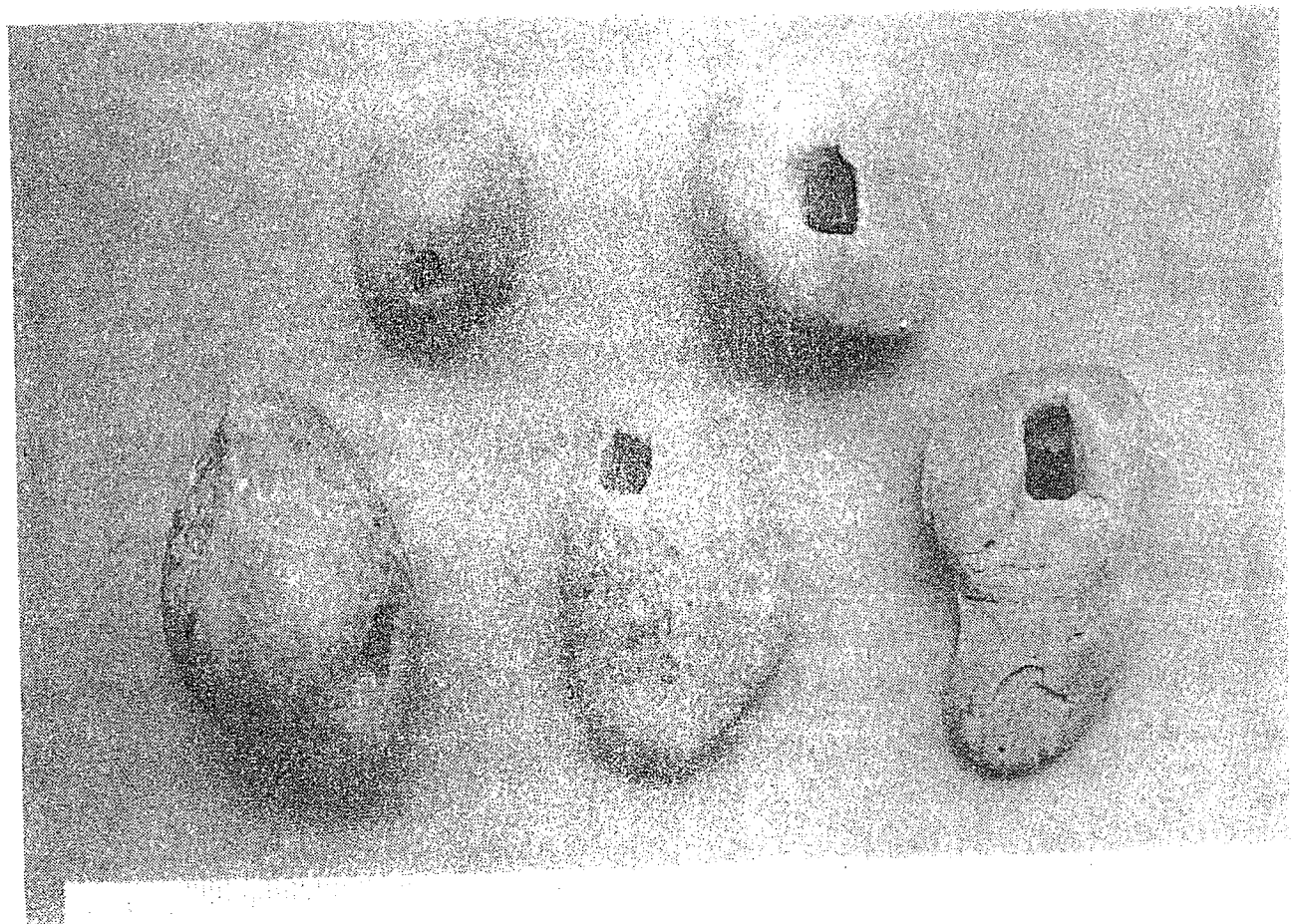
第26図
土器





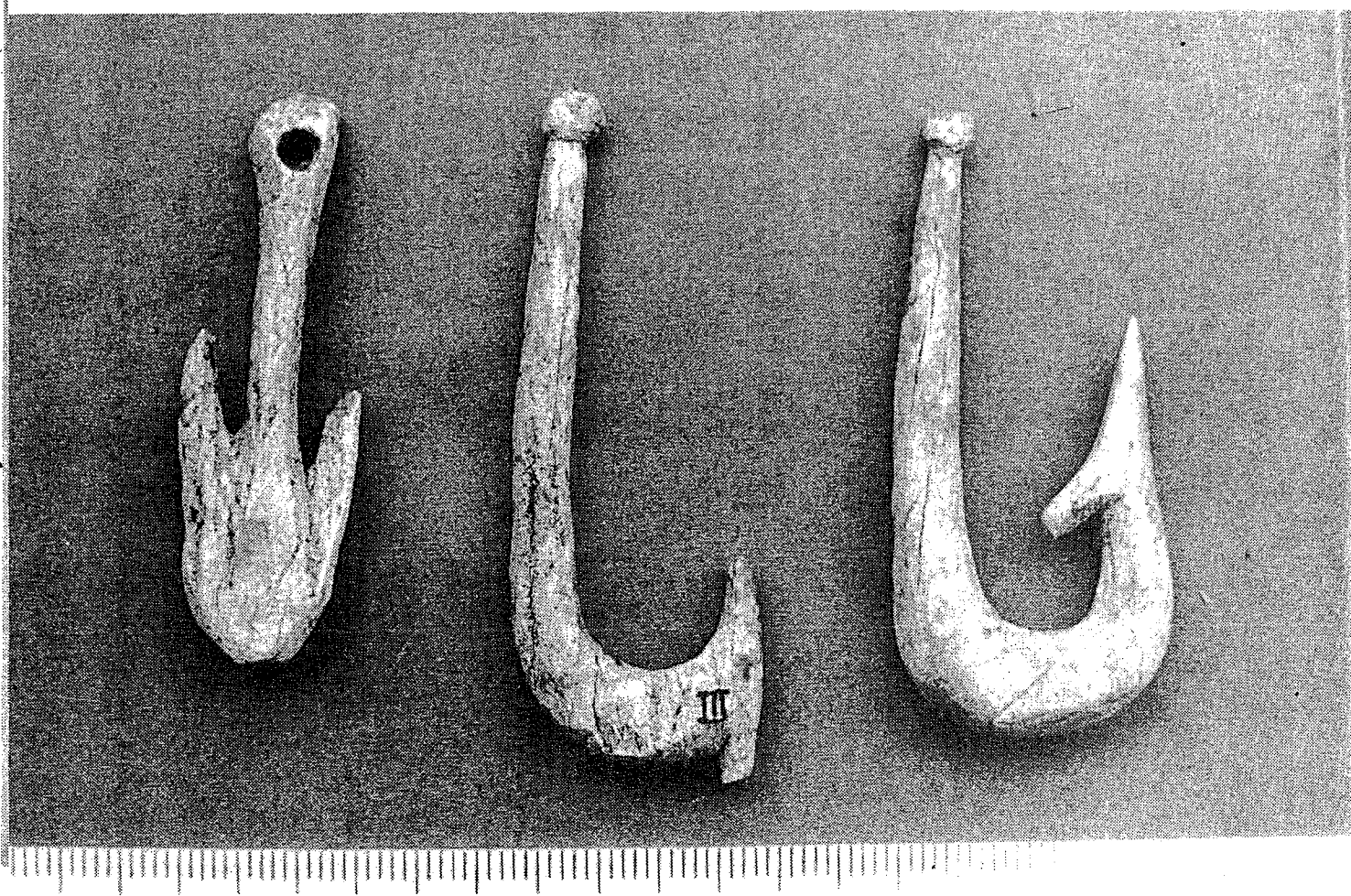
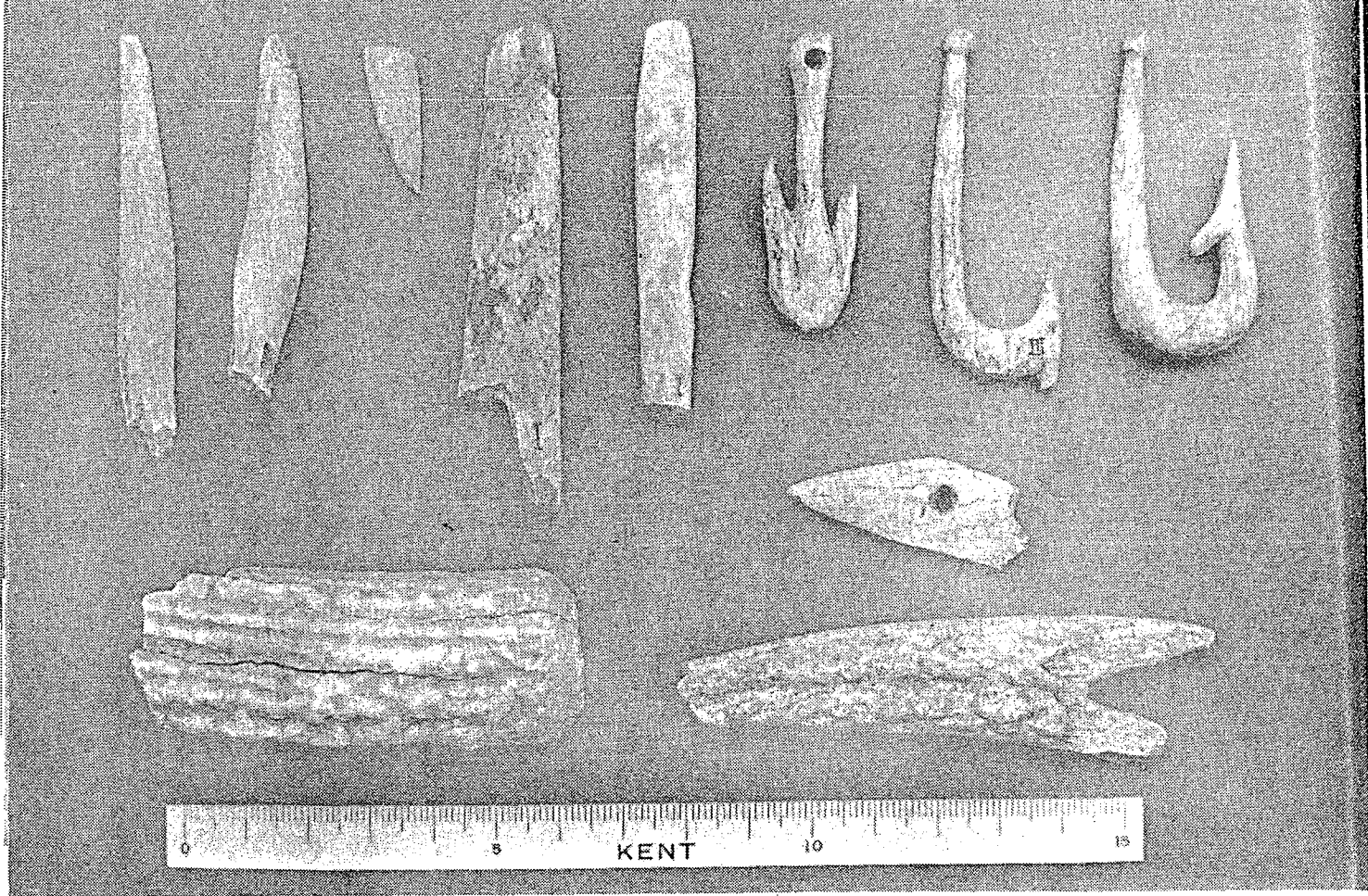
第27図 ㊥ 石 鏃

第28図 ㊦ 打製・磨製石斧頭部



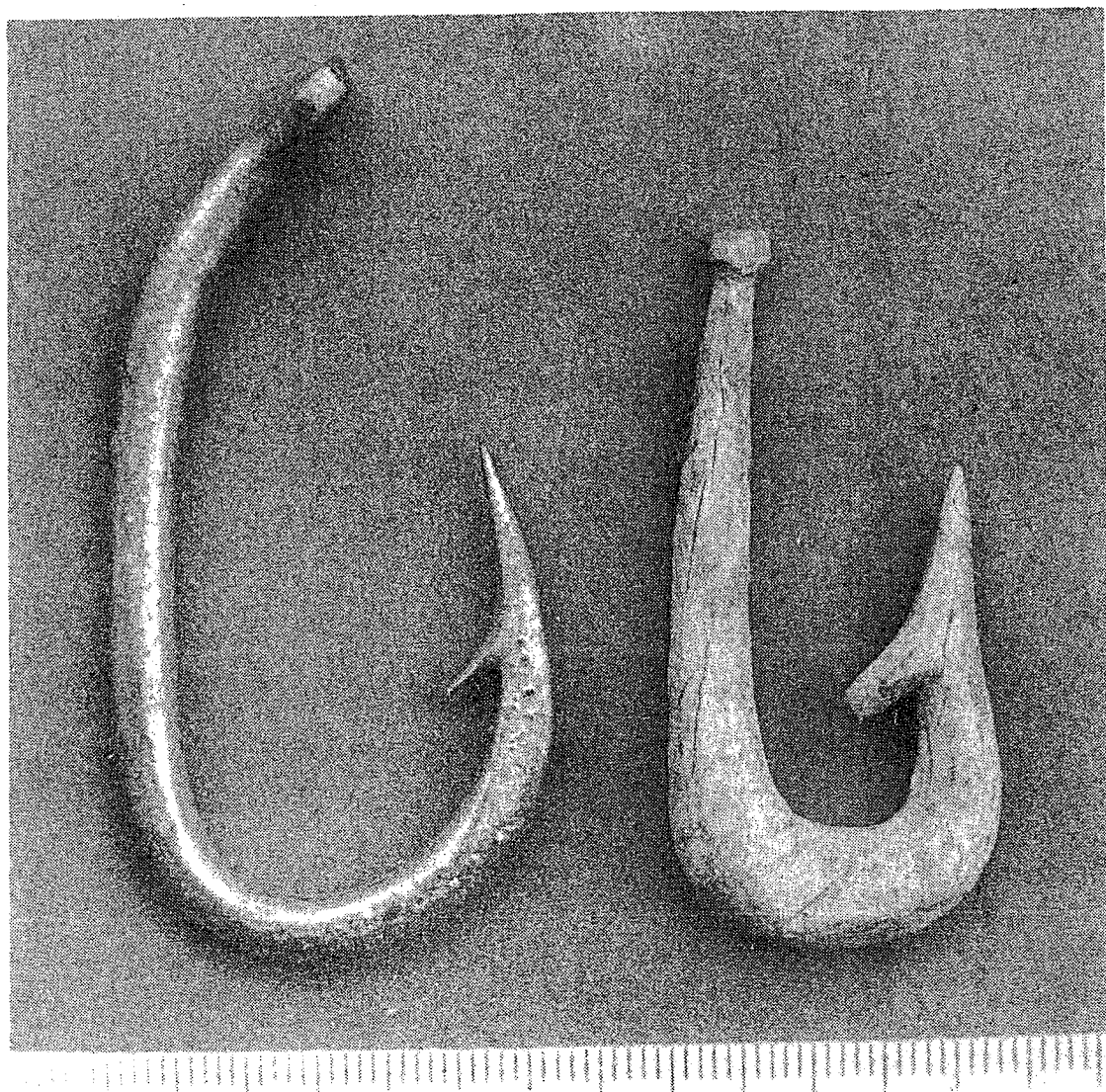
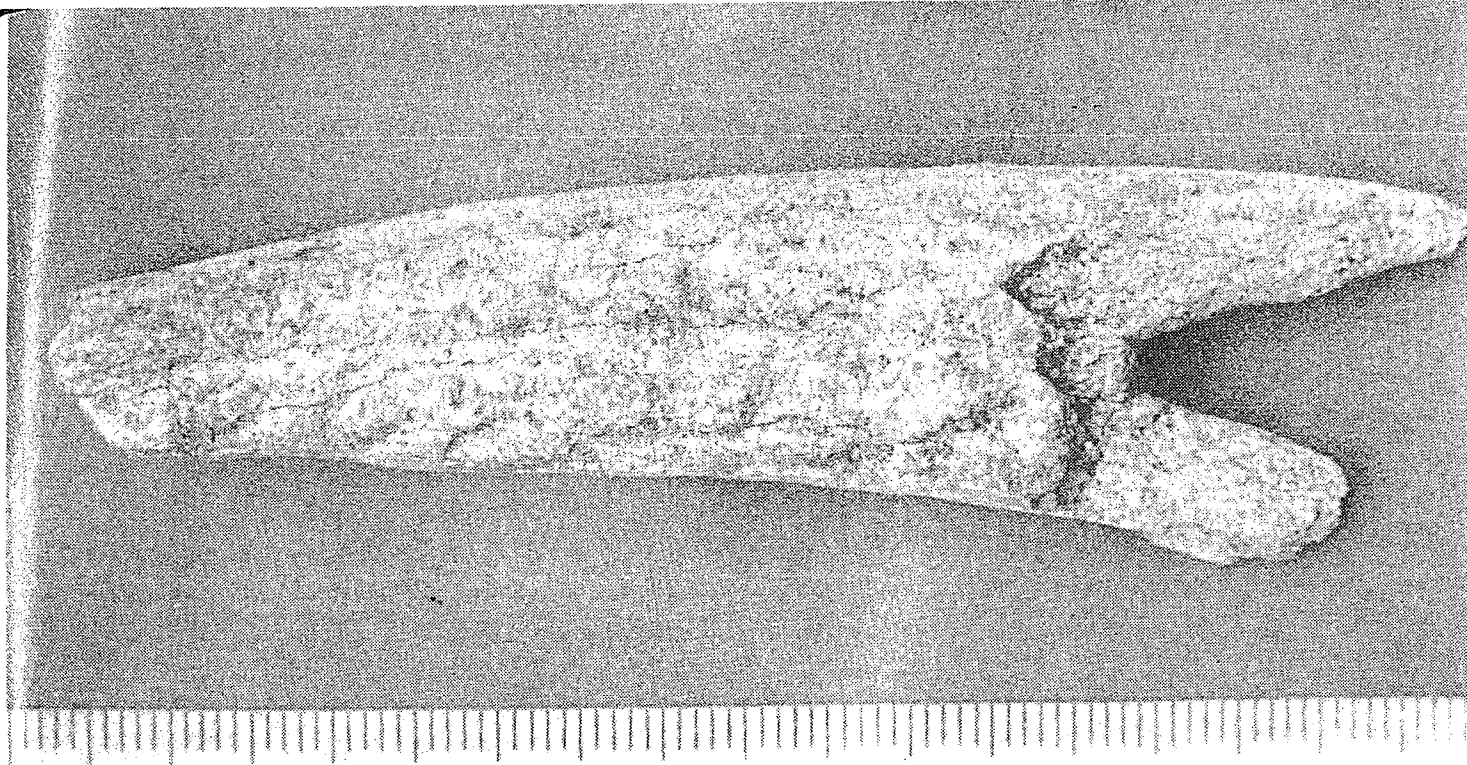
第29圖 ① 凹石の一部

第30圖 ② 方孔石の一部



第31図 ㊤ 骨角器類の一部

第32図 ㊦ 釣針拡大写真



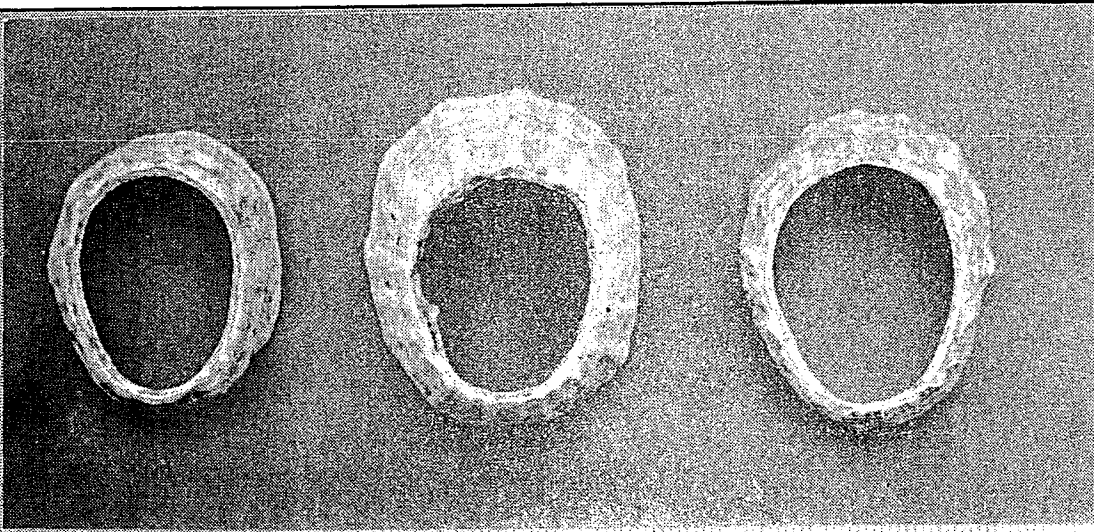
第33図 ㊦ 鈎

第34図 ㊦ 現在使用されている釣針との比較（マグロ用）

第35図

垂

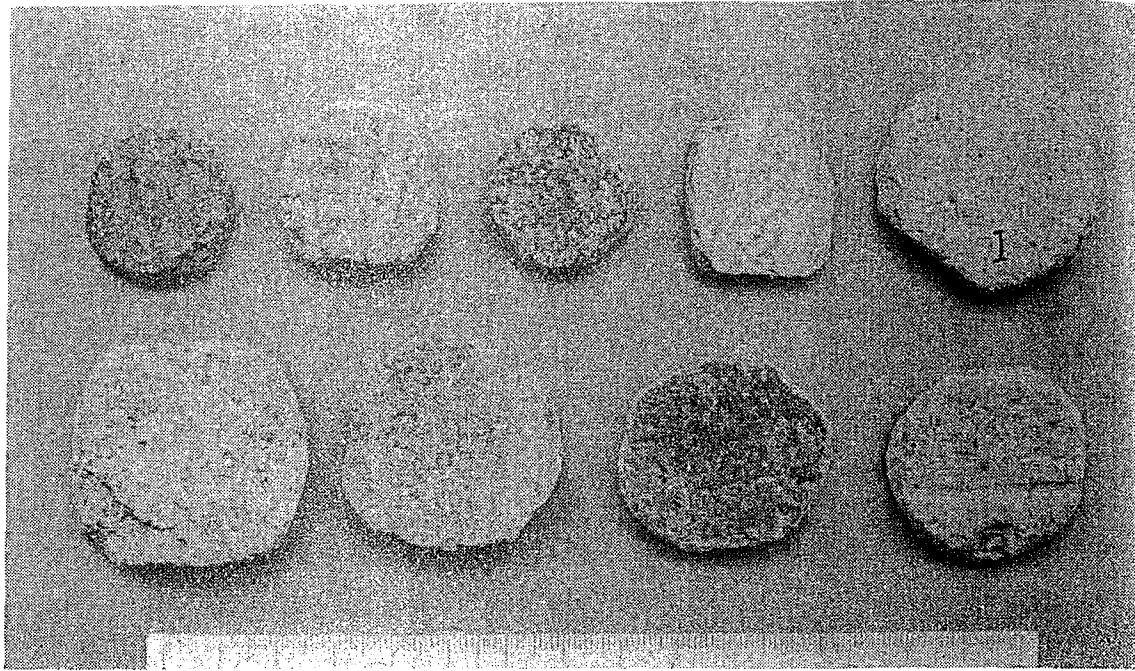
飾具?
(ユキノカサ)



第36図

土

錘?



第37図

㊦ 貝

斧?

㊦ 貝

鋸?

